小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ

矢田借屋古墳群

2006.3

石川県小松市教育委員会

矢田借屋古墳群　全景（南西から）

借屋16号墳　埋葬施設検出状況

例　言

1．本書は石川県小松市内において小松市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．対象となった埋蔵文化財は、「矢田野遺跡」「矢田借屋古墳群」（小松市月津町・矢田町地内）である。なお、本報告書では「矢田借屋古墳群」についての報告を行い、「矢田野遺跡」については次年度以降に報告を行う予定である。
3．詳細分布調査・発掘調査・出土品整理・報告書刊行は、文化庁補助金を受け、小松市教育委員会が実施した。
4．詳細分布調査、発掘調査の調査原因・調査期間・調査面積・調査担当者は次のとおりである。

【詳細分布調査】

＜調 査 原 因＞　宅地造成工事
＜調 査 期 間＞　平成12年10月24日～平成13年2月28日
＜調査対象面積＞　32,743.39㎡
＜調 査 担 当 者＞　津田隆志・福海貴子

【発掘調査】

＜調 査 原 因＞　個人住宅建設
＜調 査 期 間＞　平成13年7月16日～平成14年3月26日
＜調 査 面 積＞　1,500㎡
＜調 査 担 当 者＞　岩本信一・宮田　明

5．詳細分布調査の測量・写真撮影は上記担当者が実施し、遺物写真は岩本が担当した。
6．発掘調査の測量は上記担当者の他、坂下義視（小松市教育委員会）の協力を得ている。また同時に測量補佐として発掘調査臨時作業員を雇用している。
7．発掘調査の写真撮影は、遺構を岩本・宮田が実施し、空中写真撮影については、日本海航測株式会社に委託した。また遺物写真は岩本が担当した。
8．出土品整理及び遺物実測・製図は平成13・16・17年度にかけて出土品整理臨時作業員を雇用し、坂下義視協力の下、岩本が担当した。
9．報告書の編集・執筆は西田由美子（小松市教育委員会）・川畑謙二（小松市教育委員会）協力の下、岩本が担当した。
10．本書の第１章　位置と環境については、『矢田借屋古墳群』（小松市教育委員会2000）掲載の「第１章　遺跡の位置と環境」を抜粋・一部改変し再掲載したものである。
11．本書で示す方位はすべて真北であり、水平基準は海抜高（m）で示している。
12．遺構図版内の破線は「木根」「攪乱」を示している。
13．本調査において出土した遺物、遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。
14．本書に先立って調査成果を発表したものがあるが、その内容について相違のある場合は、本書をもって正報告とする。
15．詳細分布調査・発掘調査及び出土品整理に当たり、以下の機関・団体・個人よりご協力、ご指導を賜った。ここに記して感謝の意を表したい。（敬称略）
石川県教育委員会、（財）石川県埋蔵文化財センター、三浦俊明

目　次

第１章　位置と環境……1
　第１節　地理的環境……1
　第２節　歴史的環境……1

第２章　経緯と経過……4
　第１節　調査に至る経緯……4
　第２節　発掘作業の経過……4
　第３節　整理等作業の経過……5

第３章　遺構と遺物……10
　第１節　借屋10号墳の調査……10
　　第１項　遺構……10
　　第２項　遺物……10
　第２節　借屋12号墳の調査……12
　　第１項　遺構……12
　　第２項　遺物……12
　　第３項　埴輪……22
　第３節　借屋14号墳の調査……32
　　第１項　遺構……32
　　第２項　遺物……32
　第４節　借屋15号墳の調査……34
　　第１項　遺構……34
　　第２項　遺物……34
　第５節　借屋16号墳の調査……40
　　第１項　遺構……40
　　第２項　遺物……40
　　第３項　埋葬施設……40
　第６節　借屋17号墳の調査……48
　　第１項　遺構……48
　　第２項　遺物……48

第４章　まとめ……51

遺物観察表・写真図版……54

挿図目次

第１図　小松市の位置……1
第２図　周辺の遺跡（S=1/25,000）……2
第３図　調査区位置図（S=1/2,000）……6
第４図　調査区平面図（S=1/250）……7・8
第５図　調査区区割図（S=1/500）……9
第６図　借屋10号墳出土特殊須恵器実測図（S=1/2）……10
第７図　借屋10号墳実測図（S=1/80、1/40）……11
第８図　借屋12号墳実測図（S=1/100）……14
第９図　借屋12号墳周溝土層断面図（S=1/40）……15
第10図　借屋12号墳出土遺物実測図１（S=1/3）……16
第11図　借屋12号墳出土遺物実測図２（S=1/3）……17
第12図　借屋12号墳出土遺物実測図３（S=1/3）……18
第13図　借屋12号墳出土遺物実測図４（S=1/3）……19
第14図　借屋12号墳出土遺物実測図５（S=1/6）……20
第15図　借屋12号墳出土遺物実測図６（S=1/6、1/3）……21
第16図　円筒埴輪の各部名称……25
第17図　借屋12号墳出土埴輪実測図１（S=1/4）……26
第18図　借屋12号墳出土埴輪実測図２（S=1/4）……27
第19図　借屋12号墳出土埴輪実測図３（S=1/4）……28
第20図　借屋12号墳出土埴輪実測図４（S=1/4）……29
第21図　借屋12号墳出土埴輪実測図５（S=1/4）……30
第22図　借屋12号墳出土埴輪実測図６（S=1/4）……31
第23図　借屋14号墳実測図（S=1/80）……32
第24図　借屋14号墳周溝土層断面図・出土遺物実測図（S=1/40、1/3）……33
第25図　借屋15号墳実測図（S=1/100、1/40）……35
第26図　借屋15号墳出土遺物実測図１（S=1/3）……36
第27図　借屋15号墳出土遺物実測図２（S=1/3）……37
第28図　借屋15号墳出土遺物実測図３（S=1/3）……38
第29図　借屋15号墳出土遺物実測図４（S=1/3）……39
第30図　借屋16号墳実測図（S=1/100、1/40）……41
第31図　借屋16号墳出土遺物実測図（S=1/3）……42
第32図　借屋16号墳埋葬施設実測図１（S=1/30）……44
第33図　借屋16号墳埋葬施設土層断面図（S=1/40）……45
第34図　借屋16号墳埋葬施設実測図２（S=1/30）……46
第35図　借屋16号墳埋葬施設出土遺物実測図（S=1/3、1/2）……47
第36図　借屋17号墳実測図（S=1/120、1/40）……49
第37図　借屋17号墳出土遺物実測図（S=1/3）……50

第１章　位置と環境

第１節　地理的環境

第1図　小松市の位置

矢田借屋古墳群は、月津町地内に所在する古墳時代後期の古墳群である。昭和30年改称以前この地は、江沼郡月津町字矢田ム11番地借屋と称されていた。

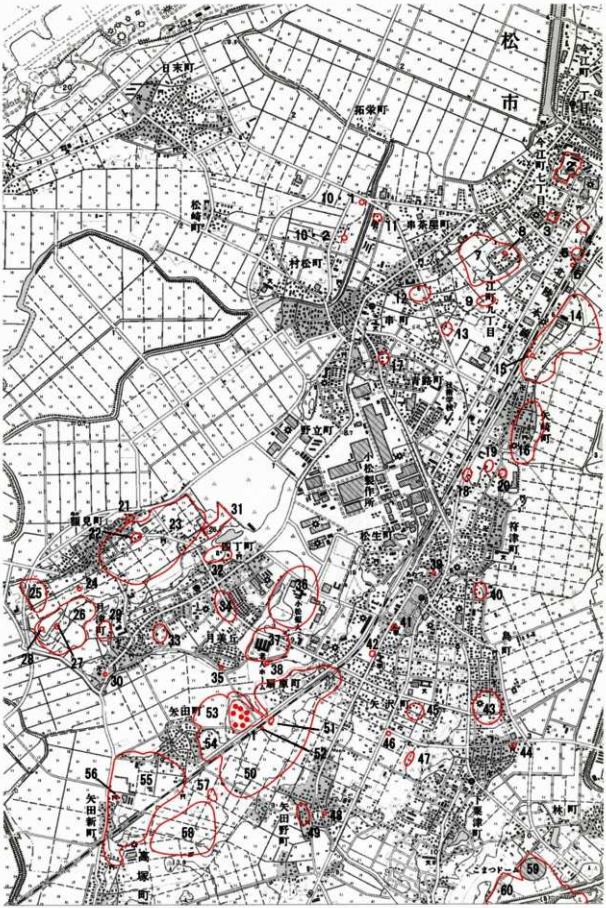
さて、矢田借屋古墳群が所在する小松市南部地域は、地形的特徴において概ね３区分することができ、遺跡分布はこの地理的条件に適応するかたちで展開している。

まず、白山連峰の前山地帯から続く標高20～50ｍの低丘陵地には、戸津・二ツ梨・那谷金比羅山古窯跡などをはじめとした日本海側有数の規模を誇る南加賀古窯群がある。また、木場・今江・柴山潟に囲まれた標高10～20ｍの洪積台地には、縄文時代から中世に至る集落跡や、本古墳群を含む古墳時代後期の古墳・集落跡が見られる。そして残る地域は、加賀三湖の各々をとりまいて形成している潟埋積平野で、水田地帯となっている。

本古墳が立地する月津台地は、近・現代の開発が著しく、土採取や谷の埋め立て、農地開発等によって、現在ではほとんど旧地形の把握が困難な状況である。

第２節　歴史的環境

中・南部地域の本遺跡周辺を中心に遺跡展開のあり方を追ってみたい。この地域で確認されている最古の資料は、念仏林遺跡（36）出土の石槍で、旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての所産であるが、単独の検出状態である。集落としての明確な展開が見られるのは、三湖が入江の状態にあったと考えられる縄文時代前期で、木場潟東南岸丘陵縁の大谷山貝塚など、貝塚を伴った集落が、潟に面して営まれているものの、この時期の遺跡分布は未だよく把握されていない。縄文時代中期になると、月津台地上を舞台に多くの集落が営まれるようになる。念仏林遺跡や、念仏林南遺跡（37）・茶臼山遺跡（26）のほか、この時期の遺物は台地上の他遺跡でも複合されるかたちで採取されている。後・晩期になると、遺跡の分布は丘陵上に中心を移し、台地上からしだいに姿を消してゆく。次に集落が展開するのは、弥生時代末～古墳時代初頭の月影式に属するもので、念仏林南遺跡、額見町西遺跡（24）では良好な竪穴住居跡を検出しており、また念仏林南遺跡では、県内の出土例も少ない山陰形甑が出土している。この時期以降、古墳時代を通して遺跡数は増加し、これらが複合して大規模な遺跡が台地上を占有している。特に、後期の集落では、月津と矢田野とを分断して柴山潟に通じる大きな谷平野の周囲に、念仏林南遺跡・矢田野遺跡（50）・矢田Ｂ遺跡（54）・刀何理遺跡（58）などが群集し、該期の古墳分布との重なりをみせている。昭和59・60年に調査された念仏林南遺跡では、竪穴住居跡21軒、掘立柱建物跡が17棟検出されている。内容的には、際だった建物や遺物はなく、さほど広くない舌状の台地を地形単位で居住地として占有した、村落形態の一典型例ということができる。本遺跡は、先に触れたように、縄文中期や弥生末、さらには古墳前・中期集落が重複しており、周辺遺跡もこれと同様な展開をみせていることが予想される。飛鳥・奈良時代になると木場潟西岸台



第2図　周辺の遺跡（S=1/25,000）

地上の薬師遺跡（14）・島遺跡（43）・柴山潟に面した矢田新遺跡（55）、古代末までの複合遺跡である額見町遺跡（23）等の存在が知られている。特筆すべきこととして、額見町遺跡・額見町西遺跡では7世紀全般にわたって、L字形カマドをもつ竪穴住居いわゆるオンドル状遺構や、鍛冶炉が検出されている。これらのことから額見町遺跡が渡来系技術者の存在を窺わせる重要な遺跡であるといえよう。

次に江沼丘陵に展開する生産遺跡について簡単に触れることにする。

南加賀窯跡群は、須恵器・埴輪・土師器・瓷器系窯跡を総称したもので、県内最大の規模をもつ。その数は、現在確認されているもので、須恵器窯跡195基、土師器窯跡約60基、瓷器系中世陶器窯跡（加賀古窯・加賀焼）39基を数える。中世陶器への転換期に若干のブランクはあるものの、須恵器生産の開始から約900年の間、連綿と生産を行っている。須恵器生産の開始は、5世紀末ないし6世紀初頭と考えられ、二ツ梨・戸津町付近の、月津台地とのつながりをもつ丘陵部にまず営まれることが注目される。この中には、埴輪併焼窯の二ツ梨豆岡山（殿様池）古窯跡が含まれており、県内唯一確認されている埴輪窯となっている。

番号	遺跡名称（旧称・通称・別名等）	所在地（通称町名等）	種別	時代
1	矢田部屋古墳群	矢田町・月津町	古墳(墳丘削平)	古墳
2	御幸塚城跡	今江町5丁目	城跡	室町
3	御幸塚古墳	今江町6丁目	史跡指定地(古墳)	古墳
4	今江五丁目遺跡	今江町5丁目	集落跡	縄文・古代
5	土百遺跡(桐百遺跡)	今江町5丁目	散布地	縄文
6	土百古墳(桐塚)	今江町9丁目	古墳	古墳
7	狐山遺跡	串茶屋町他	集落跡	古代
8	狐山古墳(狐塚)	今江町8丁目	古墳(墳丘削平)	古墳
9	今江向ノ山遺跡	今江町8丁目	集落跡	弥生
10-1,2	日末1・2号瓦窯跡	日末町・松崎町	瓦窯跡	近世前期
11	串古窯跡	串町北	窯跡(消滅)	近世前期
12	串カンノヤマA遺跡	串町	散布地	奈良
13	串カンノヤマB遺跡	串町	散布地	古墳
14	薬師遺跡	矢崎町・今江町	散布地	奈良～平安
15	矢崎B古墳	矢崎町	古墳(消滅)	古墳
16	矢崎宮の下遺跡	矢崎町	集落跡	縄文～中世
17	串カンノヤマC遺跡	串町	散布地	古墳
18	荇津B遺跡	荇津町	散布地	縄文
19	荇津A遺跡	荇津町	散布地	縄文
20	荇津C遺跡	荇津町	集落跡	古墳
21	額見神社前A遺跡	額見町	散布地	縄文
22	額見神社前B遺跡	額見町	散布地	縄文
23	額見町遺跡	額見町	集落跡	古代～中世
24	額見町西遺跡	額見町	集落跡	弥生末期～中世
25	左門殿古墳(左門殿塚)	額見町	古墳(消滅)	古墳
26	茶臼山遺跡	月津町	散布地	弥生・古代
27	茶臼山祭祀遺跡	月津町	祭祀跡	奈良
28	茶臼山古墳	月津町	古墳	古墳
29	月津オカ遺跡	月津町	散布地	古代～中世
30	興宗寺古墳	月津町	古墳(消滅)	古墳
31	臼のほぞ古墳	額見町	古墳	古墳
32	串町遺跡	串町	散布地	縄文・古代
33	月津A遺跡	月津町	散布地	奈良
34	月津B遺跡	四丁町	散布地	縄文
35	念仏塚古墳	月美丘町	古墳	古墳
36	念仏林遺跡	四丁町	集落跡	縄文
37	念仏林南遺跡	月津町	集落跡	縄文～古墳
38	念仏林古墳	月津町	古墳	古墳
39	石山古墳	荇津町	古墳(消滅)	古墳
40	島C遺跡	島町	古墳?	古墳
41	黄輪塚古墳	島町	古墳	古墳
42	矢田野エジリ古墳	矢田野町(春日町)	古墳	古墳
43	島遺跡	島町	散布地	古墳～奈良
44	下栗津1・2号横穴	下栗津町	横穴(消滅)	
45	島B遺跡	矢田野町(矢沢町)	散布地	奈良・平安
46	島経塚	矢田野町(矢沢町)	経塚(消滅)	
47	下栗津横穴群	下栗津町	横穴(消滅)	
48	中村古墳	矢田野町	古墳	古墳
49	矢田野神社前遺跡	矢田野町	散布地	平安
50	矢田野遺跡	矢田野町・矢田町他	集落跡	古墳～古代
51	矢田野古墳群	矢田野町	古墳(墳丘削平)	古墳
52	百人塚古墳	月津町	古墳(墳丘削平)	古墳
53	矢田A遺跡	矢田町	散布地	縄文
54	矢田B遺跡	矢田町	散布地	古墳
55	矢田新遺跡	矢田新町	集落跡	古代～中世
56	丸山古墳	矢田新町	古墳(祖墳)	古墳
57	狐森塚古墳	矢田町	古墳(墳丘削平)	古墳
58	刀何理遺跡	矢田町・矢田新町	集落跡	古代～中世
59	林遺跡	林町	窯跡・製鉄跡	古墳～平安
60	林超勝寺跡	林町	寺院跡	中世

第1表　周辺の遺跡一覧表

第２章　経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

矢田野遺跡・矢田借屋古墳群の調査は、平成12年度に実施した「詳細分布調査」と平成13年度に実施した「発掘調査」に分かれている。

「詳細分布調査」は、小松市矢田町地内の周知の埋蔵文化財包蔵地（矢田野遺跡・矢田借屋古墳群）内において、宅地造成工事（工事区域：32,743.39㎡）が行われることとなり、その工事区域内の地下にある遺構の状況等を確認するため平成12年度の国庫補助事業として実施したものである。なお調査の結果、過去の土取り等の開発行為によって、工事区域内のほとんどの埋蔵文化財が削平・破壊されており、一部古墳の周溝と見られるものや土坑・柱穴を確認したが、それらについてもかなりの破壊を受けている状況であった。

「発掘調査」は、小松市月津町地内の周知の埋蔵文化財包蔵地内において、個人住宅の建設（事業区域：1,500㎡－個人住宅４件分）が行われることとなり、事業者と埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行った結果、事業区域内の調査を平成13年度の国庫補助事業として実施したものである。

第２節　発掘作業の経過

詳細分布調査・発掘調査は、それぞれ以下のような経過で実施している。

詳細分布調査

平成12年10月24日～25日	重機による表土除去・トレンチ掘り下げ作業
10月30日～	トレンチ内精査作業・トレンチ設定箇所測量作業
平成13年２月28日	

発掘調査

平成13年６月４日～	調査前準備
７月10日	(重機による表土除去・グリッド杭設置作業等)
７月16日	作業員を投入し、掘削作業を開始
７月25日	借屋15号墳周溝検出(SX15)、掘り下げ作業
８月20日	借屋12号墳周溝検出(SX12)、掘り下げ作業
９月14日	借屋10号墳周溝検出(SX10)、掘り下げ作業
10月30日	借屋16号墳周溝・埋葬施設検出(SX16)、掘り下げ作業
11月12日	借屋17号墳周溝検出(SX17)、掘り下げ作業
12月３日	借屋14号墳周溝検出(SX14)、掘り下げ作業
12月25日～26日	調査区清掃作業
12月26日	調査区空中写真撮影
平成14年３月４日～26日	借屋16号墳埋葬施設掘り下げ・測量作業

また発掘調査期間中には、小松市立苗代小学校教職員のボランティア体験（８月９日：１名）、小松市立板津中学校２年生の職場体験（８月23日：４名）、博物館実習生の発掘体験（８月30日：２名）、小松市立月津小学校６年生の遺跡見学（11月19日：児童48名・教職員２名）を受け入れた。

なお、矢田借屋古墳群は平成10年度にも発掘調査を実施し、報告書を刊行しているが[※1]、平成13年度調査でグリッド杭設置作業として調査区の西側に接する道路を軸とし、任意に5m×5mのグリッドを設定して発掘調査を進めていったところ、既刊行報告書掲載の「試掘溝位置図・調査区設定及び遺構配置図」において示された遺構配置と借屋10・15号墳の周溝検出位置が整合しないことに気づいた。そこで改めて確認したところ、既刊行報告書において示された配置図において少なくとも1グリッド分のズレが認められた。第5図の調査区区割図では、平成13年度調査成果を基に、平成10年度調査区の報告書掲載図をグリッドの北方向へ6mずらし、それを修正したものとなっている。しかしこれは図面上の遺構を繋ぎ合わせたものであって、曖昧さを残す。全ては限られた時間の中での作業で、精確な検証は遂に果たすことができなかった点をここに記し、お詫び申し上げる次第である。

※1　小松市教育委員会，2000：『矢田借屋古墳群　―個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』

第3節　整理等作業の経過

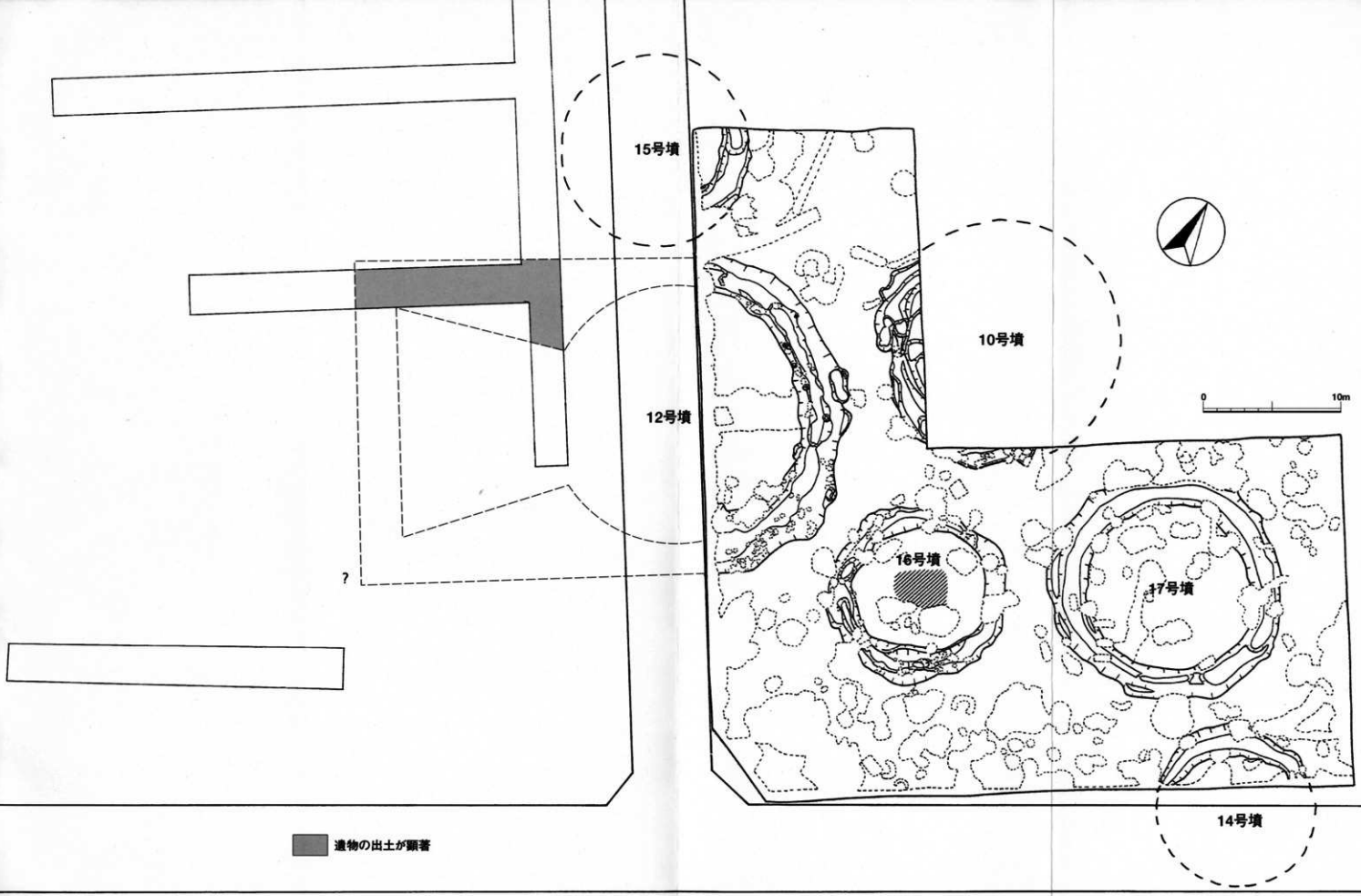
出土遺物の整理作業についても国庫補助事業として、以下のような経過で実施している。

平成13年度：平成13年度出土遺物の洗浄作業を行った。

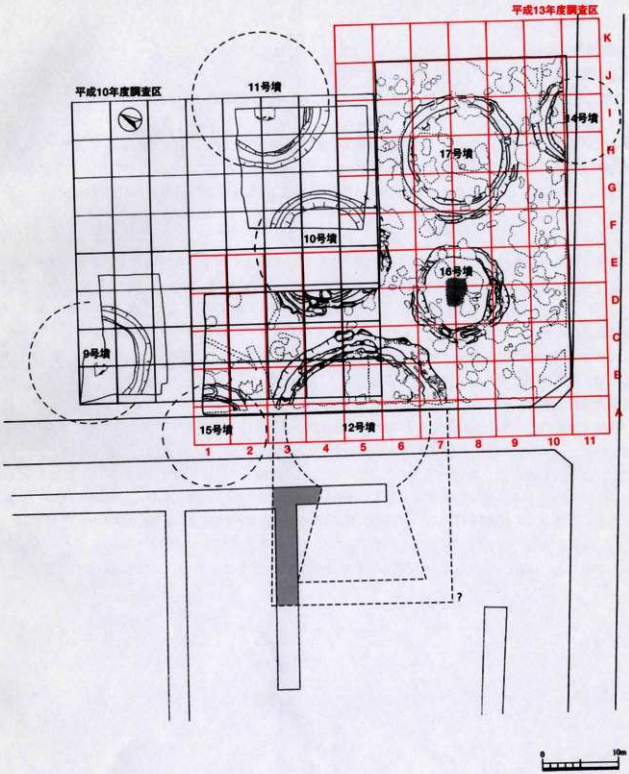
平成16年度：平成12・13年度出土遺物の洗浄・注記の各作業を行った。

平成17年度：平成12・13年度出土遺物の注記・分類・接合・実測・トレース・図版作成・原稿執筆・報告書刊行の各作業を行った。

第3図　調査区位置図（S=1/2,000）



第4図　調査区平面図（S=1/250）



第5図　調査区区割図（S=1/500）

第３章　遺構と遺物

第１節　借屋10号墳の調査

第１項　遺構

ｉ）古墳の規模・形態

借屋10号墳は平成13年度調査区の北東に位置する。当初は新規の古墳として取り扱っていたが、後に平成10年度発掘調査結果との照合関係により、10号墳として認識することができたものである。また同年調査時では「円墳、前方後円墳両者の可能性をもつ」と捉えられていたが、本調査での古墳の周溝検出状況からの判断によって、「円墳」であることが確認された。

また古墳の規模は、本調査にて検出された周溝と平成10年度調査の周溝から、直径約10.5mと推定できる。

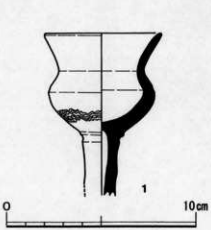
ⅱ）周溝

周溝は検出面からの値で、幅140～340cm・深さ24～50cmを測る。周溝のプランより、Ａ－Ａ´からＤ－Ｄ´までの４つの土層観察用アゼを設定した。アゼの観察では、大きく１～６層と７～12層の２つに分けることができる。中でも７～12層は黄褐色粘土塊の含有が多く見られ、平成10年の調査時で指摘されている「掘り方覆土」にあたる可能性がある。しかし同年度調査結果で見られた類とは異なる、周溝底部の不整形な様相や周溝深度の浅さは、単に調査区が削平を受けていたことのみで説明できるものではなく、不明な点も多い。

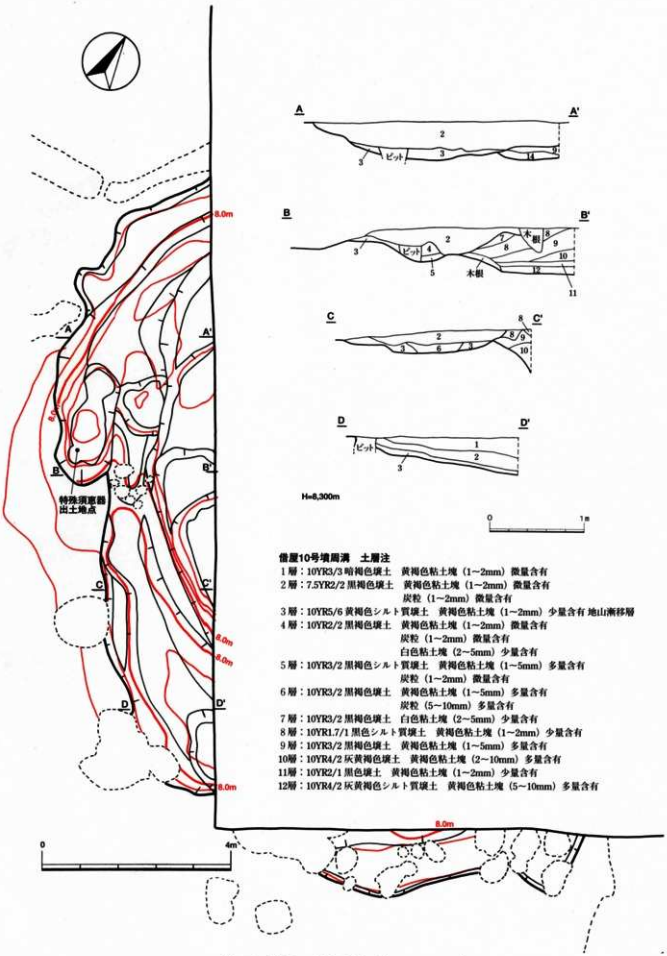
第２項　遺物

遺物はわずかに、須恵器の破片のみの出土であったが、その中でも特記すべきものとして、Ａ－Ａ´からＢ－Ｂ´アゼ間にて「特殊須恵器」がみられた。

これは「壺」を模したものと考えられる口径6.1cm、器高8.7cm、頸径4.5cm、胴径5.6cmを測る小型品で、胴部下半には櫛描波状文を施し、底部からは中空・棒状の突起が続く。その形状から、突起を介して他の器の加飾を行っていた装飾付須恵器の一部と推察できるが、他に類例を見ず判然としない。現在、当市での特殊須恵器出土の事例は矢田野エジリ古墳出土の「鈴台付高坏」１点のみであることからも、本出土品は借屋10号墳を含む矢田借屋古墳群を考える上で、興味深い資料である。



第6図　借屋10号墳出土特殊須恵器実測図（S=1/2）



借屋10号墳周溝　土層注

1層：10YR3/3 暗褐色壌土　黄褐色粘土塊（1～2mm）微量含有
2層：7.5YR2/2 黒褐色壌土　黄褐色粘土塊（1～2mm）微量含有
炭粒（1～2mm）微量含有
3層：10YR5/6 黄褐色シルト質壌土　黄褐色粘土塊（1～2mm）少量含有 地山漸移層
4層：10YR2/2 黒褐色壌土　黄褐色粘土塊（1～2mm）微量含有
炭粒（1～2mm）微量含有
白色粘土塊（2～5mm）少量含有
5層：10YR3/2 黒褐色シルト質壌土　黄褐色粘土塊（1～5mm）多量含有
炭粒（1～2mm）微量含有
6層：10YR3/2 黒褐色壌土　黄褐色粘土塊（1～5mm）多量含有
炭粒（5～10mm）多量含有
7層：10YR3/2 黒褐色壌土　白色粘土塊（2～5mm）少量含有
8層：10YR1.7/1 黒色シルト質壌土　黄褐色粘土塊（1～2mm）少量含有
9層：10YR3/2 黒褐色壌土　黄褐色粘土塊（1～5mm）多量含有
10層：10YR4/2 灰黄褐色壌土　黄褐色粘土塊（2～10mm）多量含有
11層：10YR2/1 黒色壌土　黄褐色粘土塊（1～2mm）少量含有
12層：10YR4/2 灰黄褐色シルト質壌土　黄褐色粘土塊（5～10mm）多量含有

第7図　借屋10号墳実測図（S=1/80、1/40）

第２節　借屋12号墳の調査

第１項　遺構

ｉ）古墳の規模・形態

借屋12号墳は平成13年度調査区の西側に位置する。検出された周溝は半円形を呈し、道路を挟んで平成12年度調査区域へと続く。また、平成12年度詳細分布調査での試掘トレンチからも多量の遺物の出土があり、その規模や遺物の出土量・内容から、他の古墳とは一線を画するものである。

周溝全体の様相はわからないが、前方後円墳であった蓋然性が強く、平成12・13年度の調査成果から後円径16ｍ以上、総長約35ｍ前後、墳長28ｍ前後を測るものと推定できる。

ⅱ）周溝

周溝は、検出面からの値で、幅250～460cm・深さ55～78cmを測る。周溝のプランより、Ａ―Ａ´からＤ－Ｄ´までの４つの土層観察用アゼを設定した。アゼの観察では、１～４層の黒～暗褐色シルト質壌土を上層、５～10層を下層として大別できる。また出土遺物の様相より、２時期に亘る可能性があり、本周溝の土層堆積状況もそれを示唆する。周溝底部は緩やかなＵ字を呈すが、Ｂ－Ｂ´アゼからＣ－Ｃ´アゼ間を中心とした箇所では周溝深度が深く、墳丘対面の側は緩斜面をもった段を形成する。

第２項　遺物

遺物は、須恵器の坏Ｈ蓋・身、高坏、瓶、短頸壺、長頸壺、小型壺、厚底鉢、横瓶、器台、甕、土師器の高坏、埴、壺、埴輪が出土している。なお埴輪については項を改めて述べることとする。

ｉ）須恵器

坏Ｈ蓋（第10図１～５）５点を図化した。１の口縁端部は内傾し、内面に稜をつくる。２は天井部から口縁端部にかけて丸味を帯び、口縁端部も丸く収まる。３は天井部に凹みをもち、口縁は強く開く。４は口縁端部で１と同様内傾し、外面に稜をもつ。端部は先細となる。５の口縁は開き気味で、口縁端部は細身となり、外面に稜を形成する。

坏Ｈ身（第10図６～17）12点を図化した。大別して６～８と９～17の２時期が看取される。古相を示す６～８は、いずれも口縁部高が2cm以上を測り、７・８の口縁端部は垂直気味に伸びる。受部はすべて上方に伸びるが、中でも８が強い。底部は７が丸味を帯び、６・８は平坦となる。９～17は、６～８とは時期を異にするもので、口縁部高は1cm以内に収まる。10～12・14・15の受部は凹みをもち、14は強く上方にのびる。また14～17の器肉は薄く、16・17は歪みがはげしい。

高坏（第11図18～24）７点を図化した。18～21は無蓋の坏部破片で、形態差により18・19と20・21に細別できる。18・19は口縁が開き、体部外面に沈線による２段の稜をもつ。18は稜間に斜位の連続刺突による文様を施す。20の口縁は開き、21のものは内傾し、端部は垂直となる。22は全形のわかる、無蓋のものである。やや小型で、坏部は強く開く。脚部は長脚無スカシである。23・24は脚部破片で、いずれも長脚２段スカシをもつ。

瓶（第11図25～28）４点を図化した。25の口縁部は強く外傾し、口縁端部内面には弱い稜をもつ。口縁部下端は段をつくり、頸部へと続く。また口縁部および口縁基部から頸部上半にかけては、櫛描波状文が残る。頸部は長めで、外面ほぼ中央付近には上下に沈線がめぐり、その間に連続刺突による文様を施す。胴部は肩がよく張り、扁平な器形をもつ。胴部外面にも上下の沈線がめぐり、斜位の連続刺突文様が施される。円孔はその上下沈線間に、下線を切って穿たれる。26はやや小型で、口縁部欠失したもの。頸部は胴部付近で細頸となる。頸部外面には斜位の連続刺突が確認される。胴部は上

下の沈線をめぐらせ、その間に頸部と同様の連続刺突を施す。円孔は上下の沈線を切って穿たれるが、切り口の処理は丁寧さを欠いている。また胴部下半はカキメ調整痕が残る。27・28は外面の装飾・調整が似ており、頸部に櫛描波状文、胴部に上下2段の沈線および正位の連続刺突文様と円孔が付される。また胴部下半から底部にかけてはヘラ削り調整を施している。器形は27が頸径太めで、28は胴長を呈す。

短頸壺（第11図29）1点を図化した。器形は大型で、胴部の肩張りは強い。口縁部は内傾し、端部は断面三角形を呈す。胴部外面のほぼ全体にカキ目調整痕が施されている。

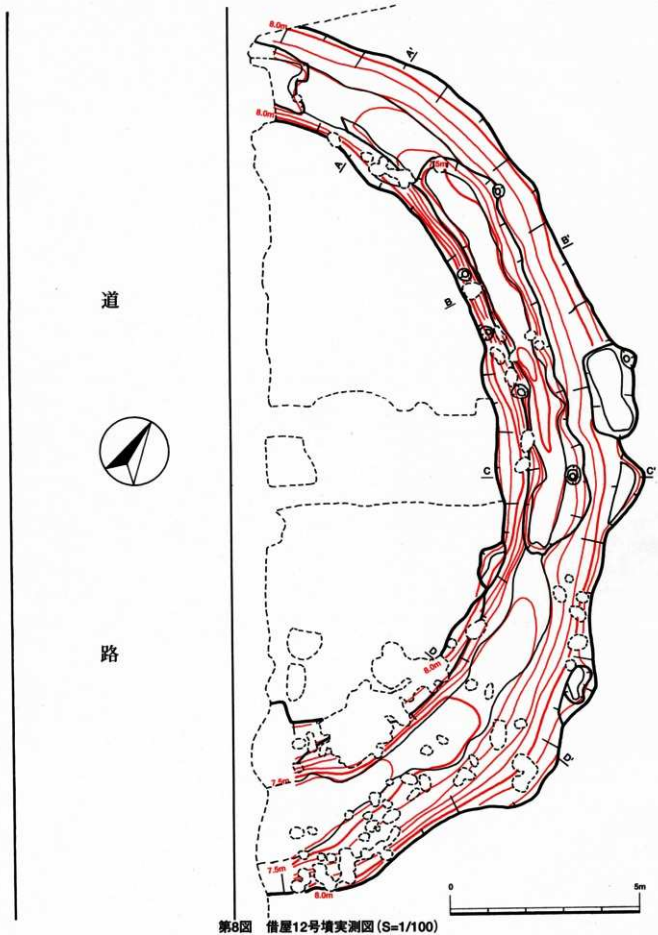
長頸壺（第12図30～32）3点を図化した。30は脚部端が欠けているが、ほぼ全形をとどめる。口縁部はやや内傾気味となり、頸部に明瞭な装飾・沈線は見られない。胴部はやや肩張りで、肩部に2条のくぼみ状の沈線をめぐらせ、間に斜位の連続刺突文様を施す。脚部は長めで、下位には緩やかな段を形成する。31も30とほぼ同様の器形を有するが、口縁端部は垂直気味となる。また外面の調整は頸部には見られず、胴部外面は剥離劣化して不明である。32は口頸部を欠失したもので、器形は胴部の肩張りが強く、むしろ楕円形に近い。胴部上面には上下段の間隔を幅広に取りながら浅目の沈線をめぐらし、その間に斜位の連続刺突文を施す。脚部は短く、外面に3段の連続した沈線を施す。脚端部は内面に稜をつくる。

小型壺（第12図33～37）5点を図化した。33は胴部破片で、肩張りが強く、扁平な器形となる。外面中央上半にかけてカキ目調整が丁寧に施され、下半はヘラ削り調整で丸底化をはかる。34は口縁部高がやや高めで、端部はやや外反気味である。胴部外面下半から底部はヘラ削り調整を施している。35の口縁部は高く、外反する。器肉は全体的に薄い。胴部は肩張り、底部はヘラ削り痕を残す。36は口縁の内傾および胴部の肩張りが強い。底部は欠失している。37は小型のもので、口縁端部は低く内傾し、狭口となる。胴部の肩張りは強い。

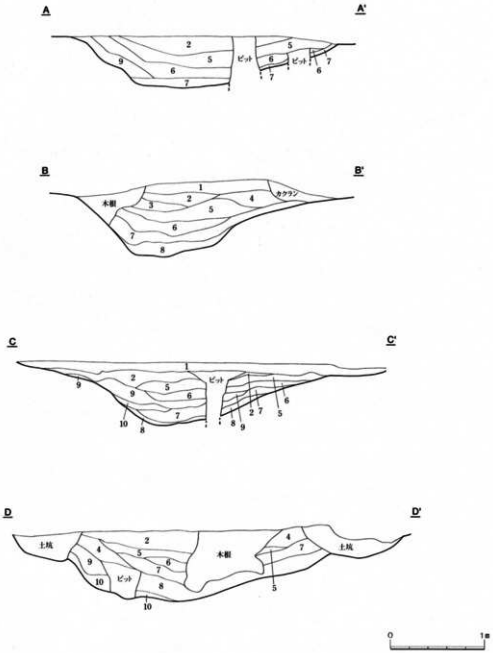
厚底鉢（第12図38）1点を図化した。口縁端部は外面に肥厚し、2段の稜をつくる。円筒状を呈す体部にはカキ目調整が施され、大型で厚手の輪状把手が付される。底部は厚手円盤状と考えられるが、欠失のため明らかでない。

横瓶（第12図39）1点を図化した。口縁端部は内外面に稜を形成し、先細となる。胴部は内外面にタタキ目・当て具痕が残る。また胴部外面には重ね焼きの痕跡が確認できる。

器台（第13図40～43）4点を図化した。40・41・43は脚部破片で、40は脚端部で緩やかなS字状に開く。また端部は肥厚気味で、稜を形成している。外面は上段に2条、下段に3条の沈線をめぐらし、沈線上段上方には1条の櫛描波状文、上下段の沈線間にはカキ目調整を下地として5条の櫛描波状文が施されている。スカシは三角形を呈し、沈線上段上方と上下段の沈線間にそれぞれ配される。41も上段に2条、下段に3条の沈線をめぐらし、各沈線間にカキ目調整を施す。上下段の沈線間の調整は明瞭でなく、連続刺突文状の痕跡が確認できるが、明瞭ではない。スカシは三角形のものが、沈線を介して3段にわたり配される。43は受部外面の脚部との接合部付近の、稜を伴った突帯が確認できる。脚部の外面は上下2段に、それぞれ2条の沈線がめぐり、その間隙にカキ目調整、正位の連続刺突文が丁寧に施されている。スカシは長方形で、2段にわたり配される。42は受部口径30.2cm、高さ40.5cmを測る大型品で、受部口縁外面は垂直に近い面をもち、口縁端部下端には2段の連続した稜をもつ。受部外面は口縁端部及び口縁基部に、櫛描波状文が施される。また受部中央上半から下半の外面はカキ目調整後、タタキ目を施す。受部内面下底にはその当て具痕が残る。脚部は沈線によって6区画に分けられ、上から2段目にヘラ削り痕、3・4・5段目に櫛描波状文が確認できるが、焼成不良のため所々に器面の劣化が生じ、明瞭さに欠ける。またスカシは長方形で、受部基部より沈線



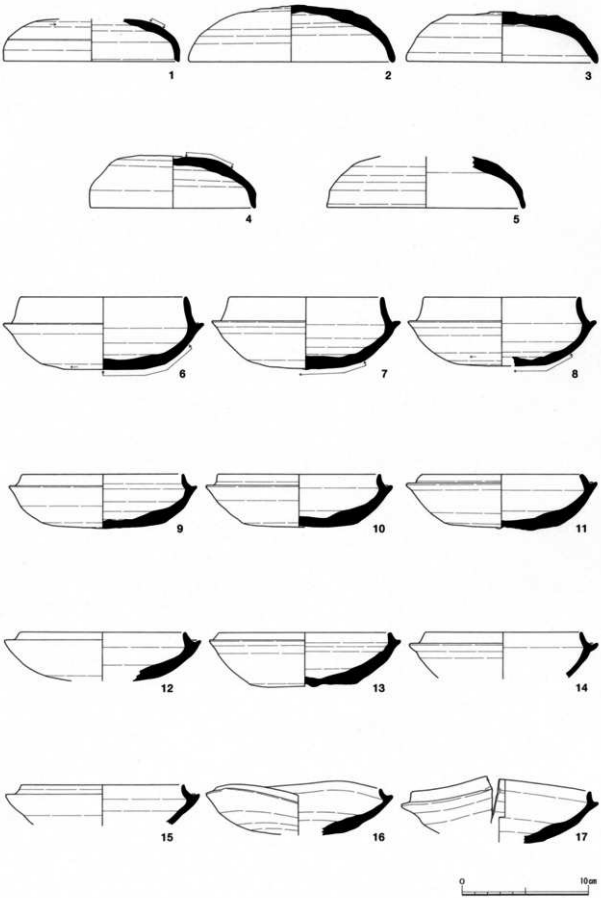
第8図　借屋12号墳実測図（S=1/100）



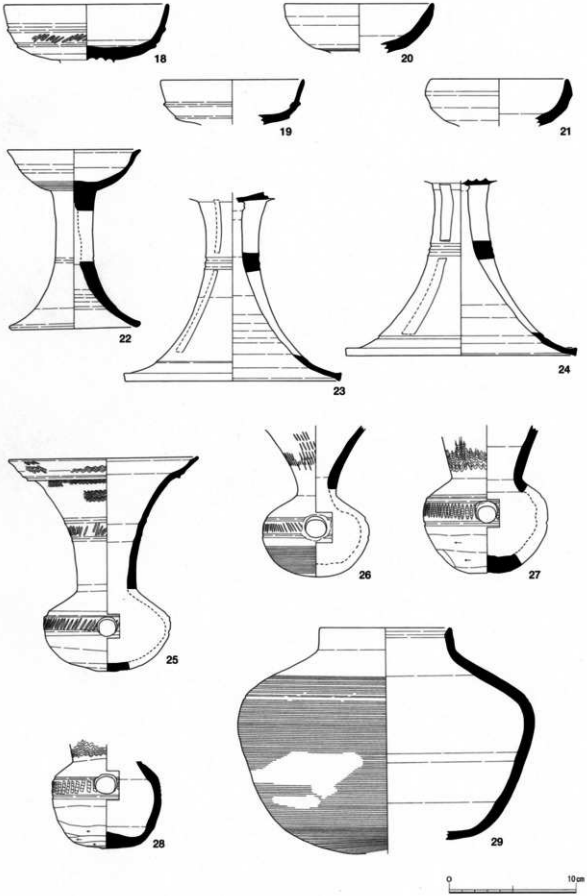
借屋12号墳周溝　土層注

1 層：10YR2/1.5 黒色シルト質埴土
2 層：10YR3/3 暗褐色シルト質埴土
3 層：10YR3/3 暗褐色シルト質埴土　黄褐色粘土塊含む
4 層：10YR3/4 暗褐色シルト質埴土　黄褐色粘土塊あり
5 層：10YR3/2 黒褐色シルト質埴土
6 層：10YR3/2 黒褐色埴土　黄褐色粘土塊含む
7 層：10YR3/3 暗褐色シルト質埴土
8 層：10YR4/4 褐色埴土　腐植残土
9 層：10YR3/4 暗褐色シルト質埴土　黄褐色粘土塊含む
10層：10YR3/2 黒褐色シルト質埴土　黄褐色粘土塊含む

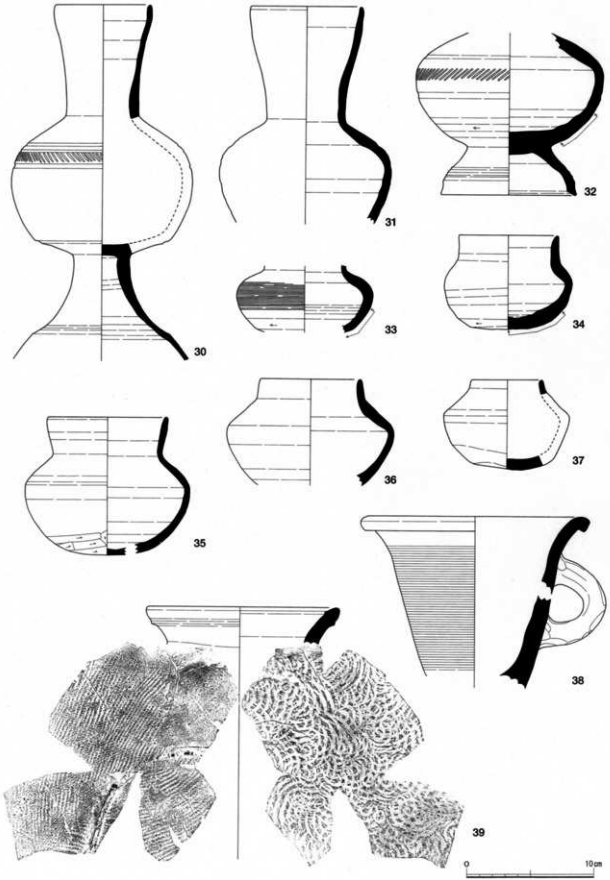
第9図　借屋12号墳周溝土層断面図（S=1/40）



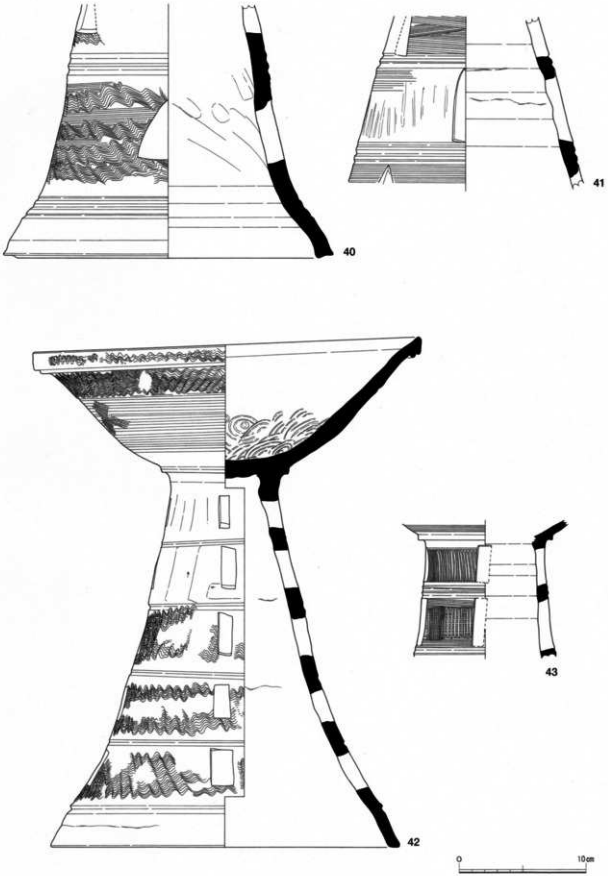
第10図　借屋12号墳出土遺物実測図1（S=1/3）



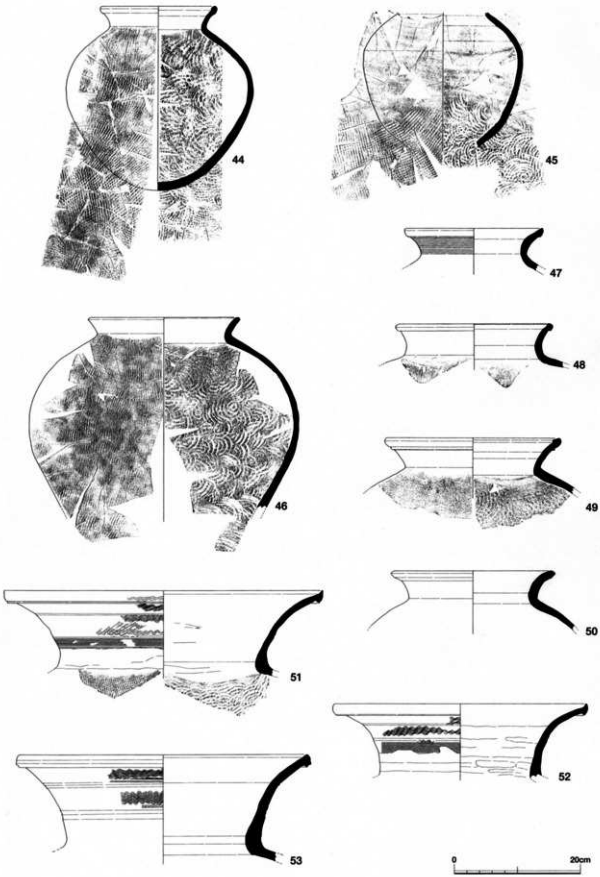
第11図　借屋12号墳出土遺物実測図2（S=1/3）



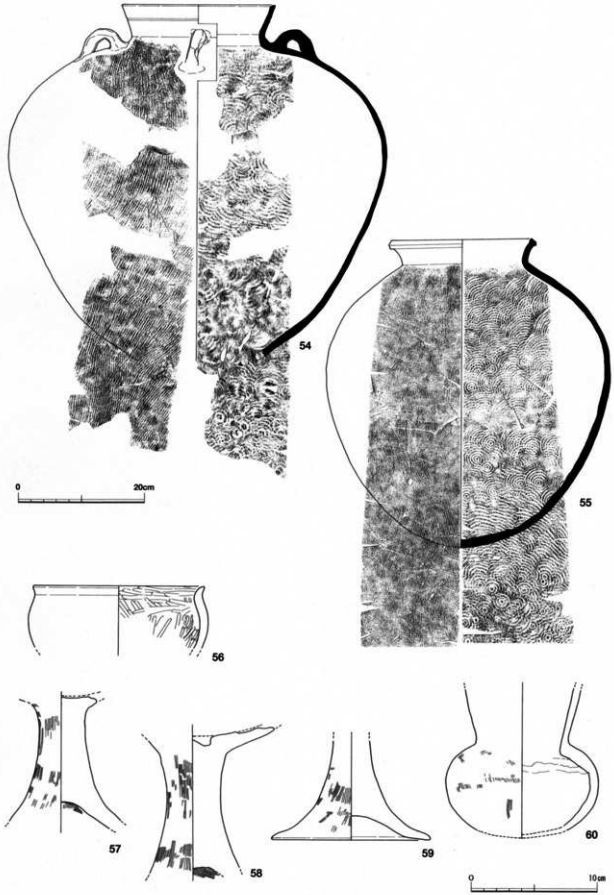
第12図　借屋12号墳出土遺物実測図3（S=1/3）



第13図　借屋12号墳出土遺物実測図4（S=1/3）



第14図　借屋12号墳出土遺物実測図5（S=1/6）



第15図　借屋12号墳出土遺物実測図6（S=1/6、1/3）

を介して5段にわたり配される。

甕（第14・15図44～55）12点を図化した。44・45は小甕、46～50は中甕、51～55は大甕に相当する。44の口縁端部は肥厚して、外面に弱い稜をもつ。胴部は球胴形となる。45は胴部上半と下半にそれぞれ張りをもつ。カキ目調整の後、胴部下半にのみタタキ目を施す。46の口頸部は短く外反し、胴部は強く肩張る。47は口頸部の外反が強く、口縁端部はその下端が肥厚している。48の口縁端部は内湾気味で、外面に2面をつくる。49は口縁端部の内外面にそれぞれ稜を形成している。50は口縁端部で断面三角形を成し、外面に2本の稜をもつ。51～53は、類似した特徴をもつもので、いずれも口頸部は強く外反し、口縁端部は外面に面をもって肥厚している。そこへ沈線が、51・52は端部下に、53は端部中央及び下に施される。口頸部外面には上下2段の沈線をめぐらせ、その区画内に櫛描波状文を施す。51はさらに、斜位の連続刺突文様を残している。また51・52は口頸部下段の沈線下にはカキ目調整を行っているが、胴部との接合部付近はナデにより消失し、53はナデのみの調整となる。54は把手付きのもので、胴部の張りが強い。また胴部の器壁は薄く、内外面ともに気泡痕が目立つ。口頸部は直立気味に外反し、口縁端部は内傾した面をもつ。口頸部外面には、中央付近に1条の沈線をめぐらす。55の胴部はなで肩で、球胴形を呈す。口頸部は短めで、口縁端部は内傾し外面に2面をもつ。

ii）土師器

埦（第15図56）1点を図化した。深身の丸底器形となるもので、口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部で短く外反する。内面は黒色処理を施し、磨き調整の痕跡を残す。

高坏（第15図57～59）3点を図化した。いずれも脚部破片で、57・58は坏部を、59は脚端部を残す。坏部は全て内面黒色処理が施されている。外面は磨耗著しいが、刷毛目調整の痕跡が確認できる。

壺（第15図60）1点を図化した。頸部はすぼまり、口頸部は直立気味に立ち上がる。胴部はきれいに球胴を描く。外面は磨耗が著しいため、刷毛目調整痕は微かに残るのみである。内面は黒色処理を施している

第3項　埴輪

埴輪は借屋12号墳からのみ出土しており、本古墳を特徴づける要素を持つ重要な遺物である。出土した埴輪は全て円筒埴輪で、形象埴輪は確認していない。本報告では破片を接合後、図化し得る個体を選別し、全42点を掲載している。これらはさらに器種の分類によりi）普通円筒埴輪　ii）朝顔形円筒埴輪　iii）器種不明　の3つに細分される。また他の属性による分類については各器種のところで述べるが、報告遺物のほとんどは全形から見れば一部の破片にすぎず、よって限定された資料による検討であることを断っておく。

各埴輪の形態については『矢田野エジリ古墳発掘調査報告書』（小松市教育委員会1992）で概観された特徴を本古墳出土埴輪も有するため、ここにその報文の一部を引用させて頂き、本古墳出土埴輪の基本形態と位置付けることとする。また本報告においての埴輪の各部の呼称については、「円筒埴輪の各部名称」（第16図）に基づいている。

普通円筒埴輪	**3凸帯4段で、2個一対で対向する透孔が2段目と3段目に穿たれており、段を違えて直交させる配置としているもの。**
朝顔形円筒埴輪	**体部が3凸帯4段で4段目ですぼまり、くびれ部に一条の凸帯をめぐらせ、朝顔部は1凸帯2段としているもの。透孔は体部において普通円筒埴輪と同様に穿たれている。**

ⅰ）普通円筒埴輪

全42点のうち、明確に識別できたものは18点である。口縁部から底部までの全形がわかるものは1・2の2点のみで、その他はいずれも底部を欠いている。読み取れた計測値の平均は、口径約26.2cm、口縁部長約8.7cmである。そのほとんどが基本形態を踏襲し、調整は外面口縁部をナナメハケ、その他の面はタテハケを施し、内面はナデ調整を行うものが多い。その一方で、形態の点で基本に則さないものを2点（1・2）確認している。1・2共に須恵質のもので、第1突帯を省略し「2突帯3段」となるもので、透孔は基本形と変わらない。ここではその突帯について、第1突帯がないものとする以外は第16図で示したものに即し、下位の突帯から順に「第2突帯」「第3突帯」と呼称する。

1は器高45.1cm、推定値で口径23.8cm、底径18.6cmを測る。形態はやや細身の円柱形で、第2突帯より底部までの間隔が広いため、器高から見ると不均衡感が強い。色調は外面ではほぼ灰色を呈すが、内面は口縁部より第2突帯位置までは灰色、第2突帯位置から底部にかけてはにぶい黄橙色となり、変色がはげしくなる。調整は外面の口縁部ではナナメハケ、その他はタテハケを施し、内面はナデの痕跡が明瞭に残り、倒立技法に見られるようなタタキ調整は見られない。また底部は断面L字形となることからも、正立成形されたものであることがわかる。

2は器高44.4cm、推定値で口径30.2cm、底径15.2cmを測る。形態は口径に比して底径が小さいため、口縁部が大きく開いた形となる。第2・第3突帯の間隔がやや広いため、1と大差ない器高でも、均整を保っているように見える。色調は外面では灰白色、内面は浅黄色で、特に底部下端においては白色を現じ、全体的に焼成が甘い。調整は外面の口縁部ではナナメハケ、その他は傾きの弱いナナメハケあるいはタテハケを施し、内面はナデのみで、タタキ調整は確認されない。底部は断面L字形であり、1と同様に正立成形にて製作されたものであろう。

1・2ともに調整の観察では確実に外面ハケ調整→突帯貼付→透孔穿孔の流れを経ており、突帯省略の理由を製作工程上に求めることは考えにくい。また、下段の透孔下端に突帯がめぐれば基本形態と大差なく、あくまでも3突帯4段の埴輪を手本としながら、しかし何らかの意図をもって意識的に第1突帯を省略したものと推察できる。また器高についても、本古墳群に近接し同時期にある矢田野エジリ古墳出土の3突帯4段をなす普通円筒埴輪は50cm程度であり、それに比べると両方共に5cm前後低い値を示すことも、2突帯3段のバランスを意識した結果として説明が可能と思われる。

また1・2以外のものは全て土師質で、その内明確に峻別できるものに、口縁部内面にハケ調整を施すものが6点（4・7～9・16・17）ある。

ⅱ）朝顔形円筒埴輪

全42点のうち、明確に識別できたものは7点である。すべて土師質のもので、口縁部から底部までの全形がわかるものはなく、一部が欠失したものばかりである。読み取れた計測値の平均は、口径約35.2cm、口縁部長約5.1cmである。個体数が少なかったため全体の傾向はわからないが、確認できたものだけでも形態の差異が認められる。基本形態を有すると思われる、口縁部が強く外反して広がる20・21・23、頸部が長く伸び、口縁部の外反が弱い19・22・24、頸部が長く伸び、肩部突帯が省略されている25である。とくに25については、普通円筒埴輪で見られた第1突帯の省略を想起させるという点で、興味深い。

ⅲ）器種不明

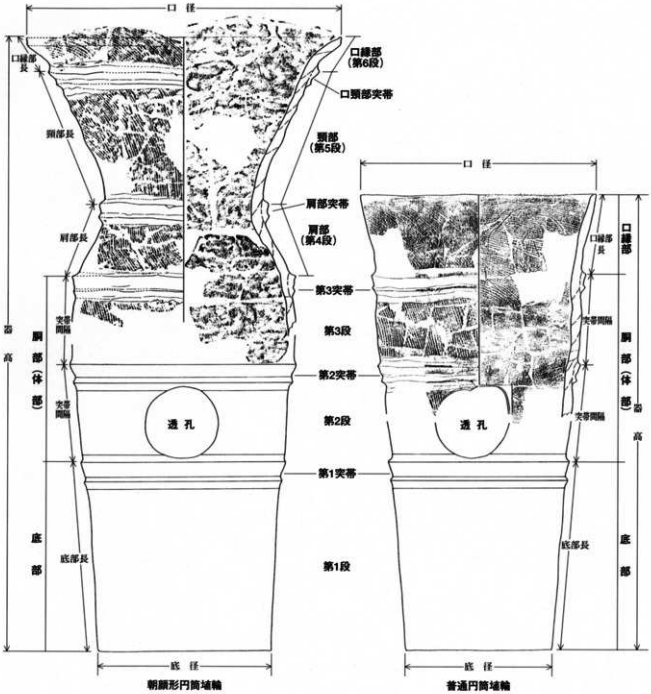
全42点のうち、17点が含まれる。いずれも口縁部を欠き、器種の識別ができなかったものである。土師質のものが大半だが、須恵質のものも2点（27・42）確認される。底部破片が多く、その形態は断面L字形が主体をなすが、一部断面U字形を呈するものが4点（31・32・34・42）ある。

＜付記＞

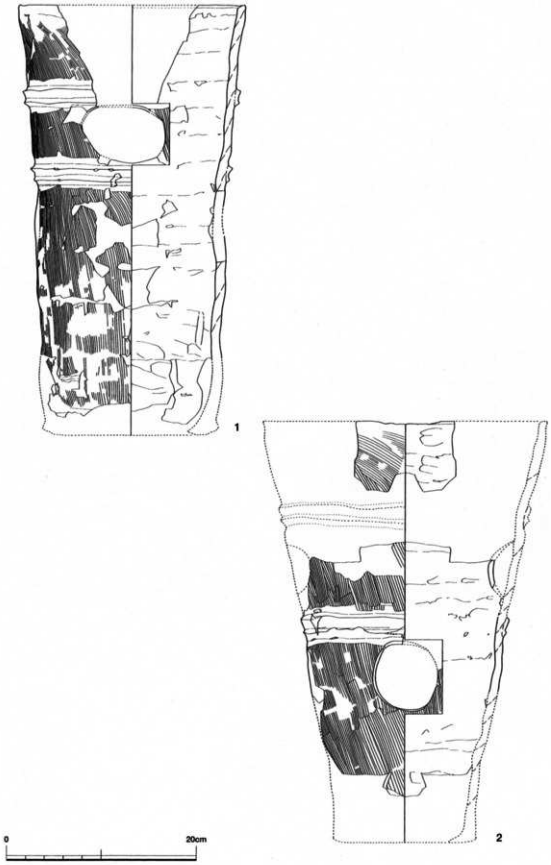
当初は円筒埴輪といえば、「3突帯4段」との思い込みで整理作業を行っており、普通円筒埴輪の1・2でみられたような全体的に小形で、第1突帯を省略する器形はあくまでも少数の一群と捉えていた。しかし、後の破片確認で、普通円筒埴輪の4についても、第1突帯を省略するものであることが判明した。また、31は底部から胴部へ長く伸びるが突帯痕跡はみられず、これも第1突帯を省略したものの破片であると思われる。また、埴輪破片の傾向性として、口縁部破片および底部破片は多くを確認したが、3突帯4段であるならば本来同程度に確認されるべき胴部破片や突帯破片については、意外にも少ない印象であった。これらの材料のみで判断するのは早尚だが、第1突帯を省略した2突帯3段の形態を有する円筒埴輪は、想像以上に多いものと思われる。矢田借屋古墳群と同時期・同地域における他の類例を求めれば、加賀市吸坂丸山5号墳で2突帯3段の円筒埴輪が出土している[※1]が、本古墳のものについては、やはり矢田野エジリ古墳でみられる形の埴輪を意識している感を強く受ける。しかし本古墳において、なぜこの形態を採用するに至ったのか、その背景まで探ることは困難であった。

最後に、これらの気づいた点は本稿執筆の終盤においてのことであり、大量の円筒埴輪片の前には本報告書での検討の余地は既になかった。また出土埴輪の説明が、突帯の有無に関する点に偏重・終始してしまい、報告の拙さを痛感する。本古墳出土埴輪が抱える課題の更なる考究は次に期したい。

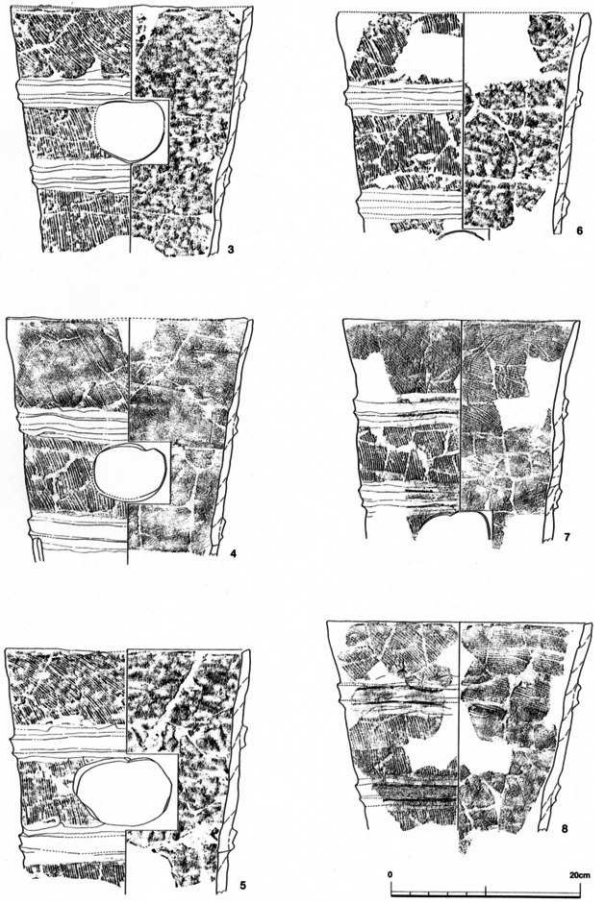
※1　三浦俊明（石川県立歴史博物館）氏の教示による。



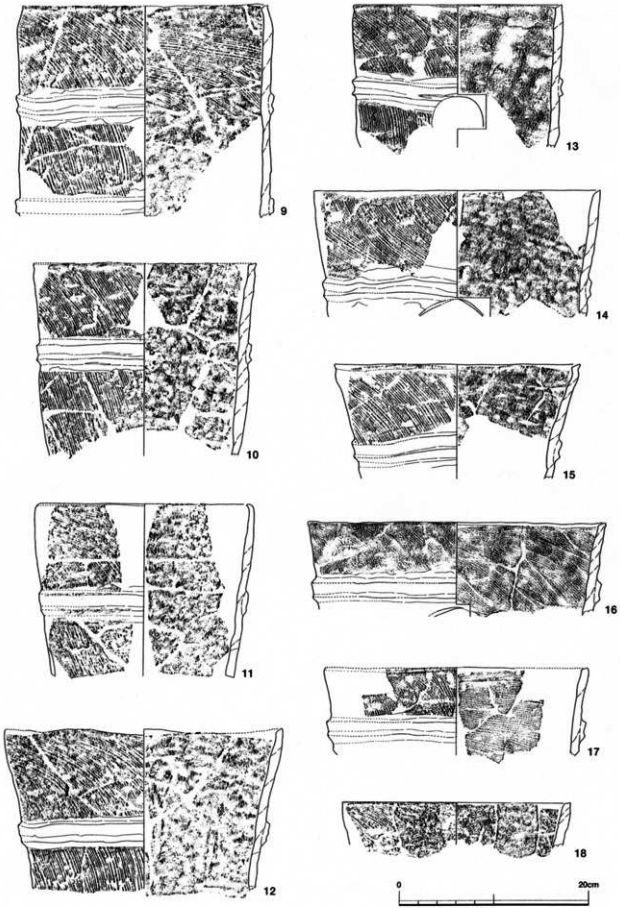
第16図　円筒埴輪の名部名称



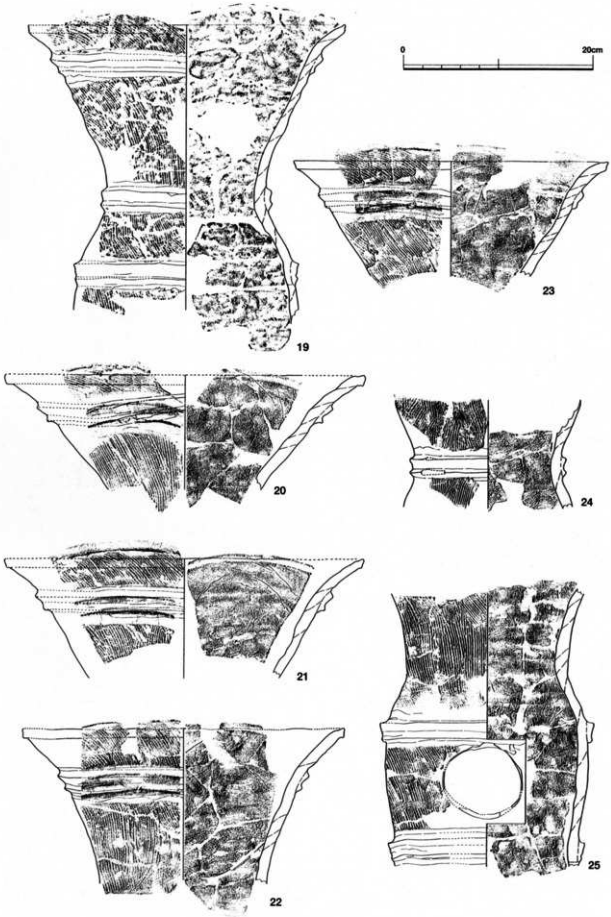
第17図　借屋12号墳出土埴輪実測図1（S=1/4）



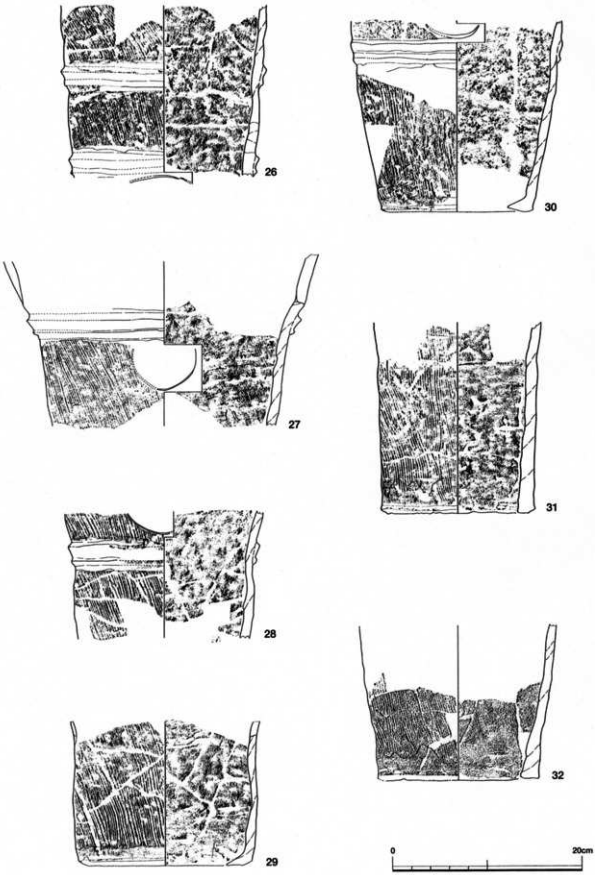
第18図　借屋12号墳出土埴輪実測図2（S=1/4）



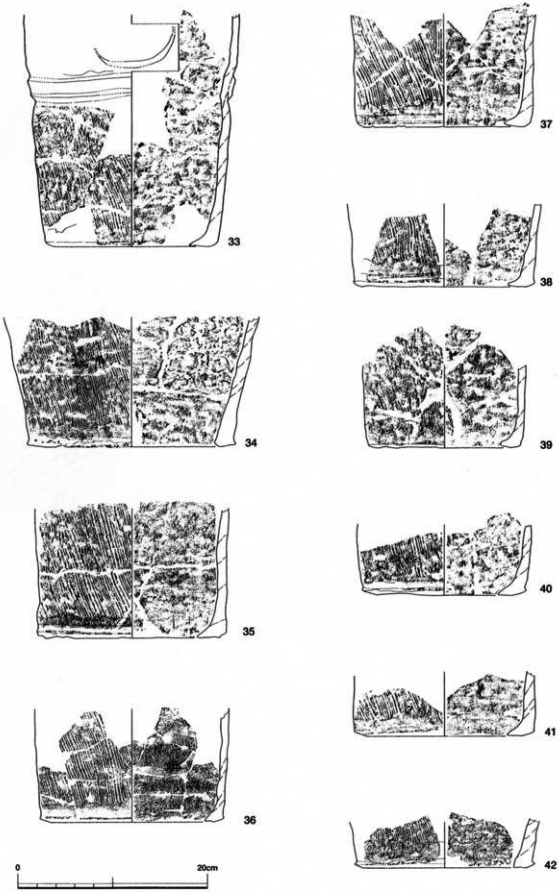
第19図　借屋12号墳出土埴輪実測図3（S=1/4）



第20図　借屋12号墳出土埴輪実測図4（S=1/4）



第21図　借屋12号墳出土埴輪実測図5（S=1/4）



第22図　借屋12号墳出土埴輪実測図6（S=1/4）

第3節　借屋14号墳の調査

第1項　遺構

i）古墳の規模・形態

借屋14号墳はその東側を崖面に隣接し、西側から東側へ向かって傾斜した、平成13年度調査区の最東端に位置する。周溝のプラン及び規模から、円墳と判断できるものである。古墳の規模は、周溝下端の墳丘側立ち上がりを基準としてみると、直径約7.5 mと推定できる。

ii）周溝

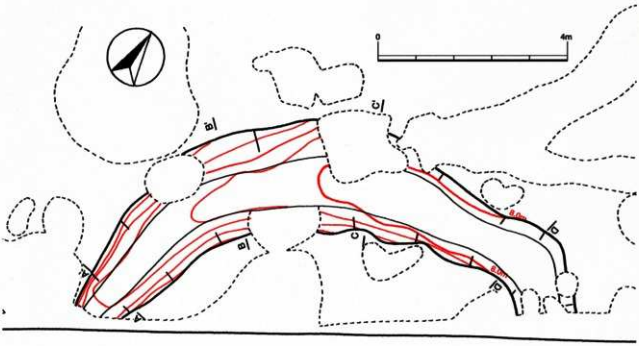
周溝は、検出面からの値で、幅100～240cm・深さ20～45cmを測るが、削平等による影響が大きいことは考慮すべきである。周溝のプランより、A－A´からD－D´まで4つの土層観察用アゼを設定した。アゼの観察では、大きく1・2層の黒褐色土と3・4層の灰黄褐色粘質土～黒褐色土の2つにわけることができ、主に2層からの遺物の出土が多く見られた。

第2項　遺物

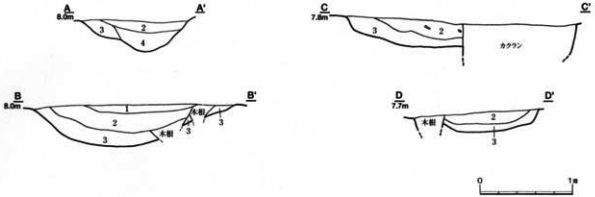
遺物は須恵器の壺、甕が出土している。

壺（第24図1）1点を図化した。小型のもので、口頸部は長く伸び、口縁端部で垂直気味で、胴部は丸味を帯びている。口頸部から胴部外面にかけてはカキ目調整を施し、胴部外面下半はヘラ削り調整が残る。

甕（第24図2）1点を図化した。中甕に相当するもので、口縁部は外反して端部で肥厚し、丸く収まる。頸部外面にはカキ目調整痕が確認できる。胴部外面は平行タタキ目の後にカキ目調整を施し、タタキ目を消している。胴部内面には当て具痕が残る。

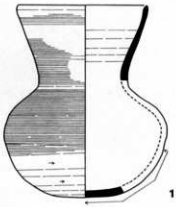


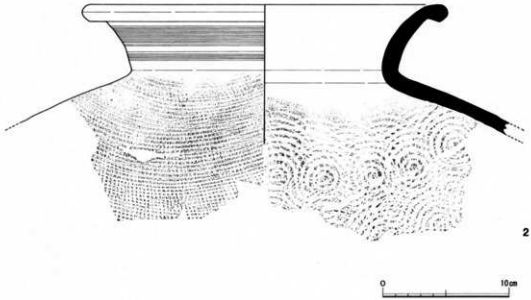
第23図　借屋14号墳実測図（S=1/80）



借屋14号墳周溝　土層注

1層:7.5YR2/2 黒褐色土　黄褐色粘土塊(1～2mm)微量含有
2層:10YR2/2 黒褐色土　黄褐色粘土塊(1～2mm)多量含有、(2～5mm)微量含有
炭粒(1～2mm)少量含有
3層:10YR4/2 灰黄褐色粘質土　黄褐色粘土塊(1～5mm)多量含有、(5～10mm)微量含有
炭粒(2～5mm)少量含有、(5～10mm)微量含有
4層:10YR3/2 黒褐色土　黄褐色粘土塊(1～2mm)多量含有、(5～10mm)少量含有
炭粒(2～5mm)多量含有





第24図　借屋14号墳周溝土層断面図・出土遺物実測図(S=1/40、1/3)

第4節　借屋15号墳の調査

第1項　遺構

ⅰ）古墳の規模・形態

借屋15号墳は平成13年度調査区の北西隅に位置する。周溝の一部が検出されたもので、周溝のプラン及び規模から、円墳と判断できるものである。古墳の規模は、周溝下端の墳丘側立ち上がりを基準としてみると、直径約9.5ｍと推定できる。

ⅱ）周溝

周溝は、検出面からの値で、幅170～250cm・深さ40～50cmを測る。周溝のプランより、Ａ－Ａ´からＣ－Ｃ´までの3つの土層観察用アゼを設定した。アゼの観察では大きく1・9層の黒～黒褐色土と2・3層の黒褐色～灰黄褐色粘質土の2つに分けることができ、特に1・9層から遺物の出土が多く見られた。また周溝底部は概ね幅広の船底状を呈している。

第2項　遺物

遺物は須恵器の坏Ｈ蓋・身、高坏蓋、高坏、鼎、短頸壺、壺、提瓶、器台、甕が出土している。

坏Ｈ蓋（第26図1～8）8点を図化した。1～4は口縁端部が外反し、天井部は平坦気味となる。6～8は天井部から口縁部にかけて丸味を帯びる。5はその中間に位置する器形をなす。

坏Ｈ身（第26図9～11）3点を図化した。9は口縁端部の反りが強く、器肉は薄い。10・11は9に比し、浅身のものである。

高坏蓋（第26図12）1点を図化した。天井部に扁平なつまみを有し、ヘラ削り調整を施す。口縁端部は外反して収まる。

高坏（第26図13）1点を図化した。脚部は欠失している。坏部底面の脚基部付近にカキ目調整痕が施されている。

鼎（第26図14）1点を図化した。胴部のみの破片で、球胴形を呈す。中央上半に上下の沈線をめぐらせ、斜位の連続刺突による文様を施す。円孔は上下の沈線の中央に穿たれている。

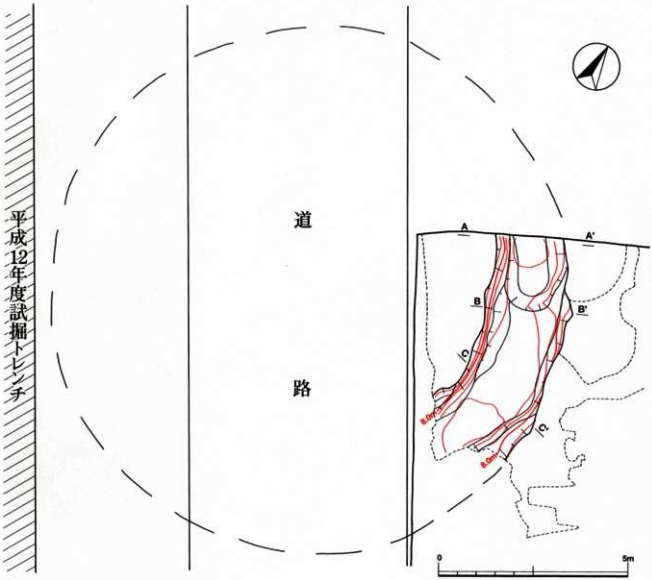
短頸壺（第26図15）1点を図化した。口縁端部は欠失している。体部外面には1条の沈線がめぐり、その下方にタタキ目痕が間隔を保ちながら施される。胴部下半から底面にはカキ目調整痕が残る。

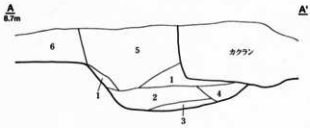
壺（第27図16）1点を図化した。頸部から口縁部にかけて大きくラッパ状に開き、口縁端部は2段の稜をもつ。頸部外面には櫛描波状文が2段にわたり施される。全体的に焼成が甘いため、その他の調整痕は不明瞭である。

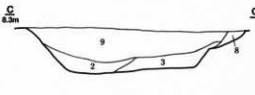
提瓶（第27図17）1点を図化した。口縁部が長めで、胴部外面には丁寧にカキ目調整が施されている。

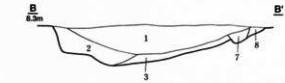
器台（第28図18）1点を図化した。受部外面はカキメ調整の後、櫛描波状文および平行タタキ目を施す。また内面下半には当て具の痕跡が残り、受部外面の脚部との接合部付近には、稜を伴った突帯がめぐる。脚部にもカキメ調整から櫛描波状文が施される。脚部のスカシは残存部分より、長方形と推定される。

甕（第28・29図19～22）4点を図化した。19～21は中甕、22は大甕に相当する。19の口縁端部は肥厚し、外面に稜をつくる。また肩部はやや肩張る。20・21は口縁部破片である。22の口縁は強く外反し、口縁端部は肥厚して外面に2面をつくる。口頸部外面には櫛描波状文を施し、その上下に2条の沈線をめぐらせる。







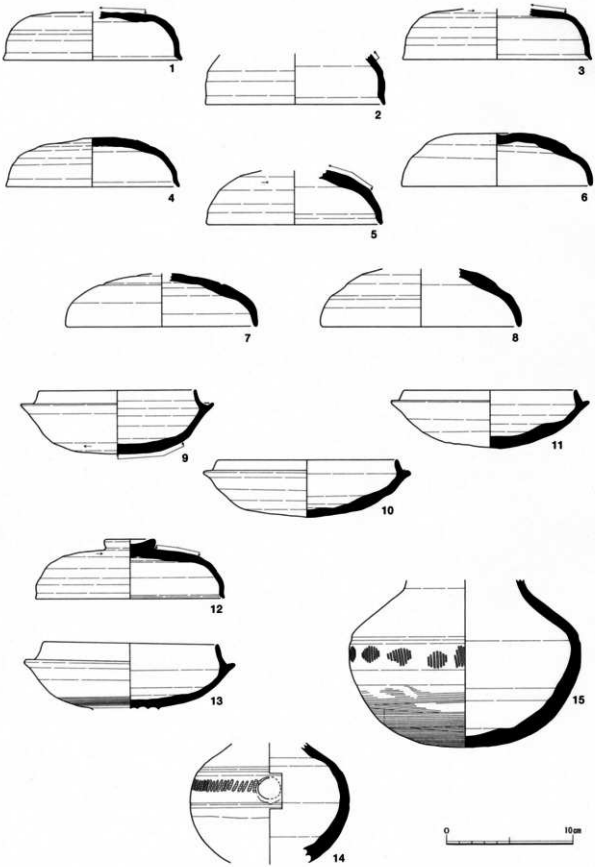


借屋15号墳周溝　土層注

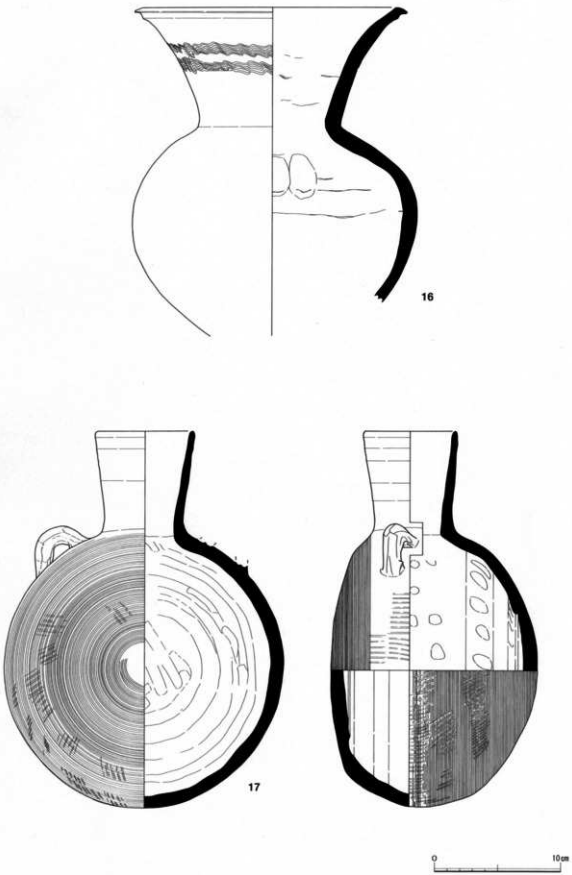
0　1m

1層：10YR2/1 黒色土　しまりなし
2層：10YR3/2 黒褐色粘質土　黄褐色粘土塊（1～5mm）多量含有
3層：10YR4/2 灰黄褐色粘質土　黄褐色粘土塊（1～2mm）多量含有
4層：10YR2/1 黒色土　黄褐色粘土塊（1～2mm）少量含有
5層：10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土
6層：10YR2/2 黒褐色土　黄褐色粘土塊（1～2mm）微量含有
7層：10YR3/2 黒褐色土　黄褐色粘土塊（1～2mm）多量含有
8層：10YR3/3 黒褐色土　黄褐色粘土塊（1～2mm）微量含有
9層：10YR2/2 黒褐色土　黄褐色粘土塊（1～2mm）微量含有しまりあり、遺物多く含む層

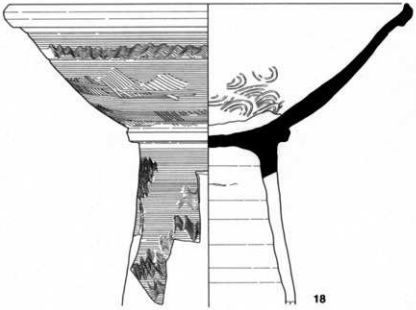
第25図　借屋15号墳実測図（S=1/100、1/40）

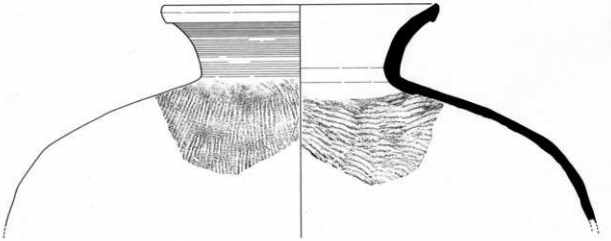


第26図　借屋15号墳出土遺物実測図1（S=1/3）

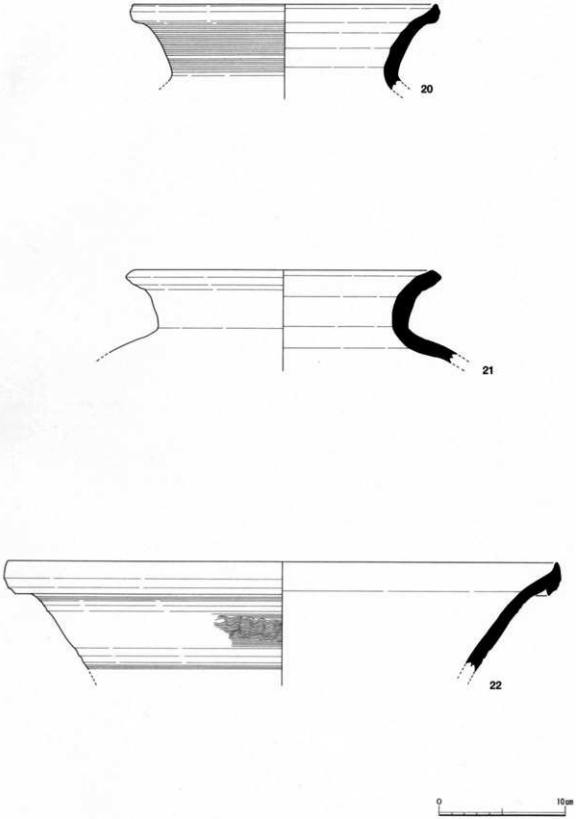


第27図　借屋15号墳出土遺物実測図2(S=1/3)





第28図　借屋15号墳出土遺物実測図3（S=1/3）



第29図　借屋15号墳出土遺物実測図4（S=1/3）

第5節　借屋16号墳の調査

第1項　遺構

ⅰ）古墳の規模・形態

借屋16号墳は平成13年度調査区のほぼ中央に位置する。周溝のプラン全体を検出することができ、円墳であることが確認された。古墳の規模は、そのほとんどが削平を受け失われており、墳丘の高さは不明であるが、周溝下端の墳丘側立ち上がりを基準としてみると、最大径9.7 mを測る。

ⅱ）周溝

周溝は、検出面からの値で、幅80～300cm・深さ10～28cmを測る。周溝のプランより、A－A′からD－D′まで4つの土層観察用アゼを設定した。

アゼの観察では、木根や撹乱の影響により、詳細な周溝覆土の様相を捉えることは困難であったが、3・4層の黒褐色粘質土が覆土の主体を成すと考えられ、遺物の出土も多く見られた。

第2項　遺物

遺物は、周溝の残存状況が良好であった南側を中心に、須恵器の坏H蓋・身、甕、壺、小型壺、提瓶が出土している。なお周溝の北東側では削平が著しく、遺物の出土はほとんど見られなかった。

坏H蓋（第31図1）1点を図化した。一部欠損しているが、天井部から口縁部にかけて丸味を帯びた器形を成す。口縁端部は内側に収まる。

坏H身（第31図2）1点を図化した。口縁部は内傾しながら立ち上がり、端部は厚みを保ったまま、外反気味に収まる。

甕（第31図3・4）2点を図化した。3は口縁部分が欠失している。頸部には櫛描波状文が施され、胴部には斜位の連続刺突による文様を施し、その上下に沈線がめぐる。円孔は上下の沈線のほぼ中央部分に穿たれる。4は体部のみで、正位の連続刺突を施し、その上下に沈線がめぐるが、3に比してその線は弱い。また円孔は上下の沈線内に収まらず、下線を切る形で穿たれている。

壺（第31図5）1点を図化した。壺としたが、その小振りな器形から小甕と称すべきかもしれない。胴部は全体的に球胴を呈し、外面上半から中央部にかけてカキ目調整痕、下半に平行タタキ目を残す。また内面下半には当て具痕を残すが、明瞭な同心円形は見られない。

小型壺（第31図6）1点を図化した。口縁部は外反し、無蓋であると思われる。胴部は肩が強く張っている。

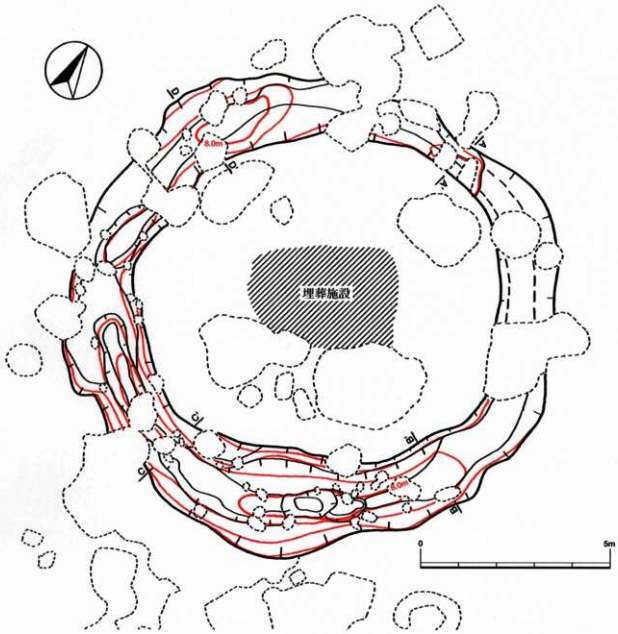
提瓶（第31図7）1点を図化した。口頸部は比較的短めで、口縁端部外面は垂直に近い形状を有するが、口縁部全体としては歪みが著しい。体部は片面が平たく、その対面は緩やかに膨らんでおり、カキ目調整痕はその膨らんだ面に施されている。また輪状の把手はやや細身で、押しつぶされたように楕円を描きながら付帯する。

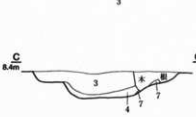
第3項　埋葬施設

ⅰ）埋葬施設概要

借屋16号墳の埋葬施設は、本古墳の精査時に白～灰色粘土塊を検出しており、南加賀において特有の礫床をもつ粘土室[22]（以下粘土室と呼称）の可能性を示唆していたが、8本のサブトレンチを設定し、その遺存を確認したものである。

粘土室の壁は粘土室北西側を中心として、ほぼ室を囲む状況が検出された。特に遺存の良かった北側では、壁幅は東西幅159cm、南北幅37cm、西側では東西59cm、南北幅280cmを測る。土層断面での観察では、壁の立ち上がりを確認でき、粘土壁基部の土層は基本的に粘土壁上では黒色土（1層）

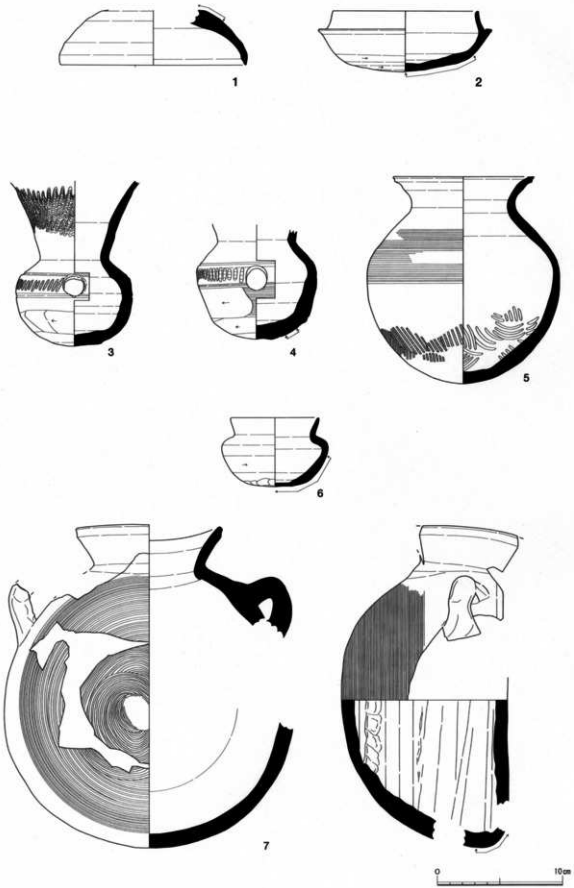




借屋16号墳周溝　土層注

1層：7.5YR3/2 黒褐色土　しまりなし
2層：7.5YR5/6 明褐色土　しまりあり
3層：10YR2/2 黒褐色粘質土　黄褐色粘土塊（1～2mm）少量含有　遺物多く含む層
4層：7.5YR3/2 黒褐色粘質土　黄褐色粘土塊（1～2mm）少量含有、(2～5mm）多数含有
炭粒（1～2mm）微量含有
5層：7.5YR5/6 明褐色土　しまりなし
6層：10YR3/2 黒褐色土　黄褐色粘土塊（2～5mm）多量含有

第30図　借屋16号墳実測図（S=1/100、1/40）



第31図　借屋16号墳出土遺物実測図（S=1/3）

が堆積し、基部直下では黄褐色粘土塊を多量に含む黒褐色土（3・5層）、含有物をあまり含まない黒褐色土（10層）が互層をなす、という状況が共通している。

礫床は約280cm×160cmの範囲で認められ、径5cmほどの小礫が主体であるが、10cm大のものも特に粘土室の北側を中心に散見される。また粘土室の北側（E－8グリッド内）において、直径約10cmの範囲で赤色顔料の分布を確認した。

礫床下では厚さ5～35cmの掘り方土層を確認し、埋葬施設造成のための掘り込み、粘土壁の壁溝にあたる溝状の遺構、柱穴が検出された。掘り込みは粘土室中央から、浅い土坑状のものが確認できる。溝状遺構の幅は上端で25cm前後、下端で10cm前後を測り、粘土室をほぼ全周する。また柱穴の中で、一際大きなP1・P2は粘土室の南北でそれぞれ検出されたもので、P1は上端67cm×41cm、深さ50cm、P2は上端62cm×32cm、深さ40cmと、共にその規模において相似する。しかしこれが実際に粘土室の構築等に関わるものかの詳細な検討はできなかったため、D－D′間のエレベーション図の提示にのみ、とどめておきたい。

※1 「箱形粘土棺」（上野1952）、「南加賀型木芯粘土室」（樫田1989）、「木造粘土被覆室」（河村1997）に定義されるものと同類のものである。

ii）埋葬施設出土遺物

埋葬施設内では、須恵器の坏H蓋・身、小型壺蓋、小型壺、玉類の管玉が見られた。これらの出土地点を見てみると、須恵器は粘土室東南側の壁に近い位置に偏在し、玉類は全て粘土室北側に集中し、赤色顔料の分布範囲とも近接した位置に点在していた。また逆に粘土壁中央部では遺物は見られなかった。小型壺蓋と小型壺は粘土室東側で互いに近接して出土しており、胎土の様相も類似していることから、蓋壺セットで副葬された可能性が高い。これら遺物の出土状況を埋葬時のものと見るならば、遺体は粘土室中央に、室の北側に頭部を向け安置させていた様子が推察される。また遺物を詳細に見ると、時期の異なるもの（3・5）も確認しており、追葬が行われた可能性もある。但し撹乱等の外的影響が無いとは言い切れず、真に埋葬時の状況を反映しているのかは判断し難い。なお遺物番号の内、1、4～6、8～15については第32図中の番号と一致している。

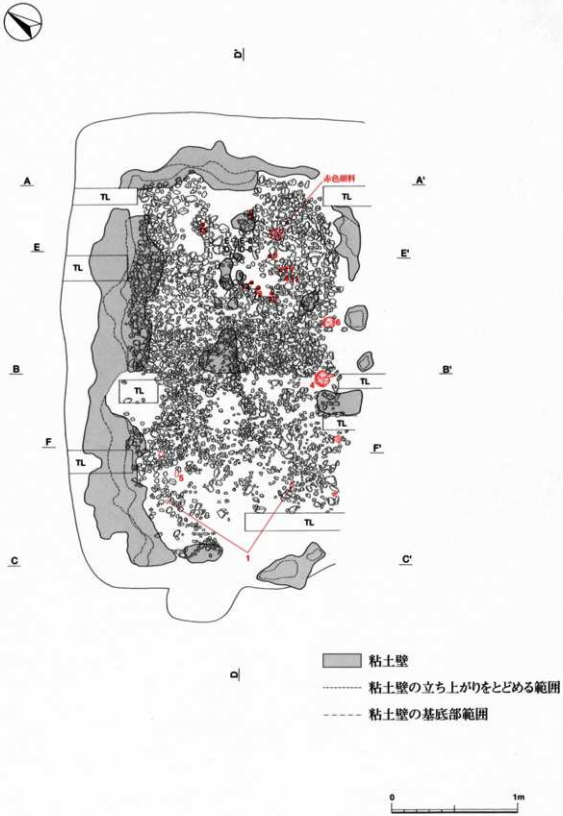
坏H蓋（第35図1～3）3点を図化した。1の口縁部は強く内傾し、外面に2段の稜をもつ。また口縁端部は先細となって外反し、内面に稜をつくる。2の口縁部はやや外傾し、口縁端部内面に稜をもつ。3は時期の異なるもので、橙色を呈す酸化焼成品である。

坏H身（第35図4・5）2点を図化した。4は口縁部が垂直気味に伸びる。受部は先細で上方へ伸び、凹みをつくる。5は3と同じく時期を異にし、酸化焼成による変色が著しいもので、3とセット関係の可能性を有する。口縁部高は短く、内傾は強い。受部には凹みをつくる。

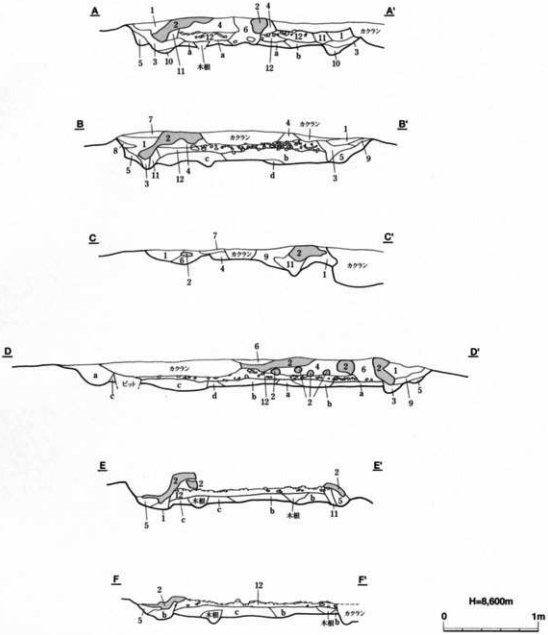
小型壺蓋（第35図6）1点を図化した。天井部は平坦で、口縁端部は断面三角形。内面に稜をもつ。

小型壺（第35図7）1点を図化した。口縁部を欠いたもので、胴部上半で肩が強く張る。口縁基部付近には把手の痕跡が残る。胴部外面に上下2段にわたり幅広の沈線をめぐらせ、その間に櫛描波状文を施す。また胴部外面下半はヘラ削り調整痕を残す。

管玉（第35図8～15）8点を図化した。14が緑色凝灰岩質の他は、全て碧玉質の石材で統一される。直径・長さ共に最も大型のものは10で、直径10.2mm、長さ35mm、小型のものは13で直径7.5mm、長さ23mm、14で直径8 mm、長さ21mmを測る。全て片面穿孔であるが、8・9・10・13の終孔口の位置はずれを生じている。



第32図　借屋16号墳埋葬施設実測図1（S=1/30）



借屋16号墳埋葬施設　土層注

〈覆　土〉

1層：10YR2/1 黒色土　炭粒（1～2mm）微量含有、黄褐色粘土塊（1～2mm）微量含有

2層：白色～灰色粘土塊

3層：10YR3/2 黒褐色粘質土　黄褐色粘土塊（2～10mm）多量含有、（1～2mm）少量含有、炭粒（1～5mm）多量含有

4層：10YR2/2 黒褐色土　白色粘土塊（2～10mm）少量含有、炭粒（1～5mm）微量含有

5層：10YR3/2 黒褐色土　黄褐色粘土塊（2～10mm）多量含有、炭粒（5～10mm）多量含有、含有物の粒子大きい

6層：10YR4/2 灰黄褐色粘質土　白色粘土塊多量含有、粘土壁の崩壊か？しまりなくすぐ崩れる

7層：10YR2/2～2/3 黒褐色土　白色粘土塊（1～2mm）微量含有、黄褐色粘土塊（1～2mm）微量含有

8層：10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土　白色粘土塊（2～5mm）少量含有

9層：10YR3/2 黒褐色土　黄褐色粘土塊（1～2mm）少量含有

10層：10YR2/2 黒褐色土　黄褐色粘土塊（1～2mm）微量含有、炭粒（1～2mm）微量含有

11層：10YR3/3 暗褐色土　白色粘土塊（2～10mm）少量含有、炭粒（2～5mm）少量含有

12層：10YR2/2 黒褐色土　炭粒（1～5mm）少量含有、黄褐色粘土塊（1～2mm）少量含有

〈堀り方〉

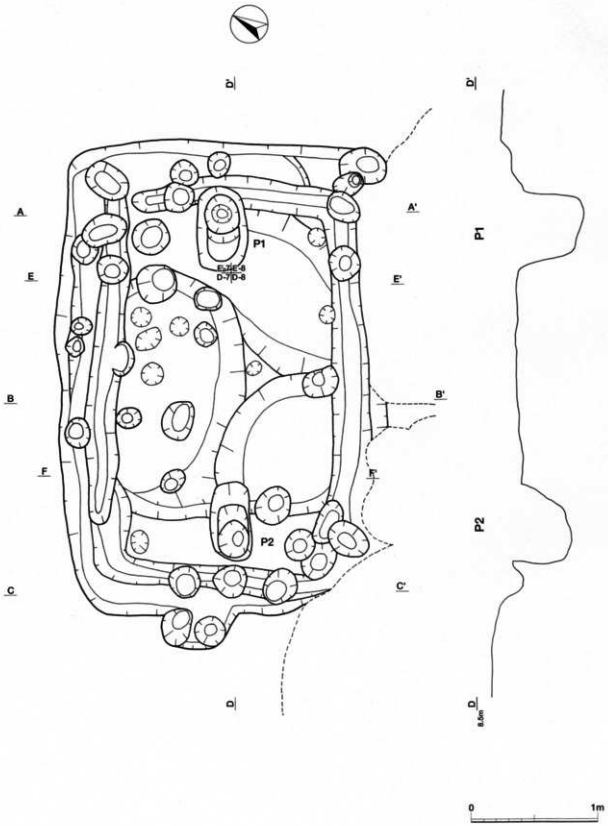
a層：7.5YR4/3 褐色土　炭粒（1～2mm）微量含有

b層：7.5YR2/1 黒色土　黄褐色粘土塊（2～10mm）多量含有

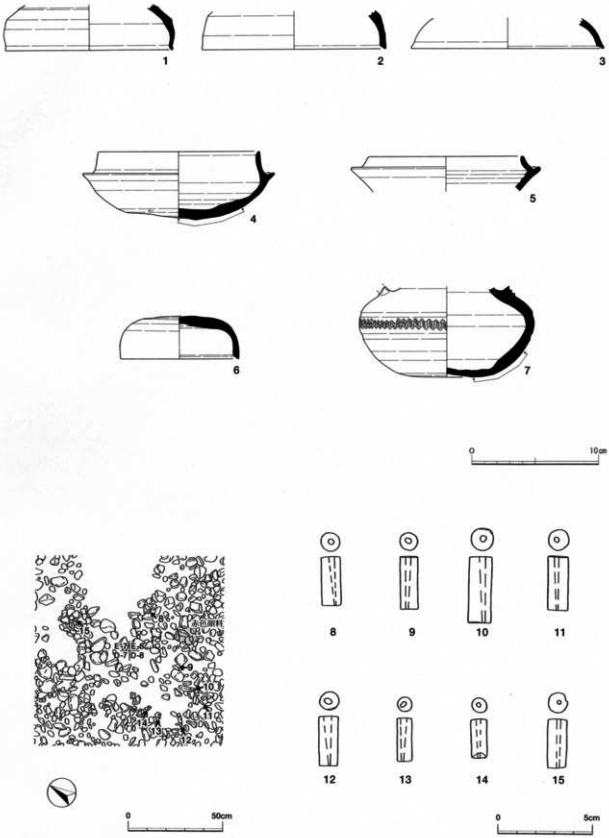
c層：10YR4/3 にぶい黄褐色土　黒褐色土が帯状に分布

d層：7.5YR5/6 明褐色土　炭粒（1～2mm）微量含有

第33図　借屋16号墳埋葬施設土層断面図（S=1/40）



第34図　借屋16号墳埋葬施設実測図2（S=1/30）



第35図　借屋16号墳埋葬施設出土遺物実測図（S=1/3、1/2）

第6節　借屋17号墳の調査

第1項　遺構

ⅰ）古墳の規模・形態

借屋17号墳は平成13年度調査区の東側に、借屋16号墳と並列するように位置している。本墳も16号墳と同じく周溝のプラン全体を検出することができ、円墳であることが確認された。

古墳の規模は、そのほとんどが削平を受け失われており、墳丘の高さは不明であるが、周溝下端の墳丘側立ち上がりを基準としてみると、最大径10.3 mを測る。

ⅱ）周溝

周溝は、検出面からの値で、幅170～250cm・深さ22～48cmを測る。周溝のプランより、A－A′からF－F′まで6つの土層観察用アゼを設定した。アゼの観察では、2・3層の暗～黒褐色土および4層のにぶい黄褐色粘質土が覆土の主体を成すと考えられ、遺物の出土も多く見られた。

第2項　遺物

遺物は、周溝の残存状況が良好であった西側を中心に、須恵器の坏H身、高坏、甕、甕、土師器の高坏が出土している。なお周溝の東側は谷部へと続き、遺物の出土も少なくなっている。

ⅰ）須恵器

坏H身（第37図1～3）3点を図化した。1は口縁部が内傾し直線的に伸びる。底部は丸味を帯びた器形を呈す。2は口縁部が外反気味に立ち上がり、底部は平たい器形となる。3の口縁部は欠失して不明であるが、丸味を帯びた受部は小さく、器肉も薄い。また底部は平たい器形をもつ。

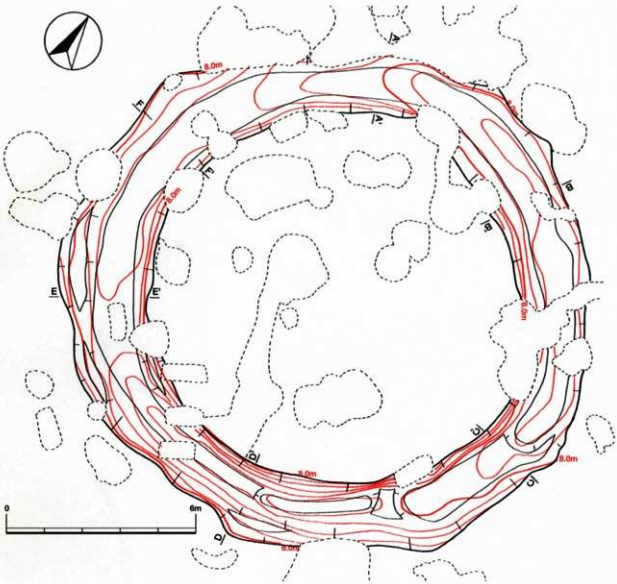
高坏（第37図4・5）2点を図化した。4は無蓋のもので、坏部の口縁部は端部に向かうにつれ外傾する。坏部外面には上下2段の稜をもち、その間に斜位の連続刺突による文様を施す。脚部は長脚2段スカシであるが、上段のスカシは薄く切り込み状に入っている。5は有蓋のもので、坏部の口縁部は端部に向かい内傾しながら、やや長めに伸びる。外面はカキ目調整痕が施され、脚部は長脚2段スカシである。

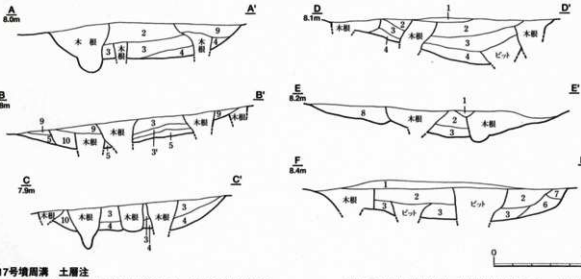
甕（第37図6・7）2点を図化した。6の口縁端部は弱い凹みをもつが、ほとんど水平に近い。また口縁部の幅は狭く、外傾も強い。口縁部下端には明瞭な段をもち、頸部へと続いている。頸部には櫛描波状文がほぼ全面に施される。胴部にはほぼ正位の連続刺突による文様を施し、その上下に沈線がめぐるが、下の沈線はヘラ削りによって一部が消失している。円孔は上下の沈線のほぼ中央部分に穿たれる。7は口縁端部が欠失しているが、6に比べると口縁部の幅は広く、外傾も弱い。また頸部は長く伸び、胴部付近では細頸となる。頸部外面は中央に沈線がめぐり、口縁基部から頸部中央下端にかけ櫛描波状文が4段にわたって施されている。胴部には正位の連続刺突による文様が施され、その上下に沈線がめぐるが沈線によって区画された幅は狭く、円孔は上下の沈線を切って穿たれている。また胴部内には円孔を刳り抜いた後の残片と思われる粘土板が残っている。

甕（第37図8）1点を図化した。中甕に相当するものと考えられ、頸部は強く外反し、丸い口縁端部をなす。外面はカキ目調整を施している。

ⅱ）土師器

高坏（第37図9）1点を図化した。脚部破片で、脚基部は短く開いている。外面には刷毛目調整痕が残るが、磨耗が著しく、判然としない。

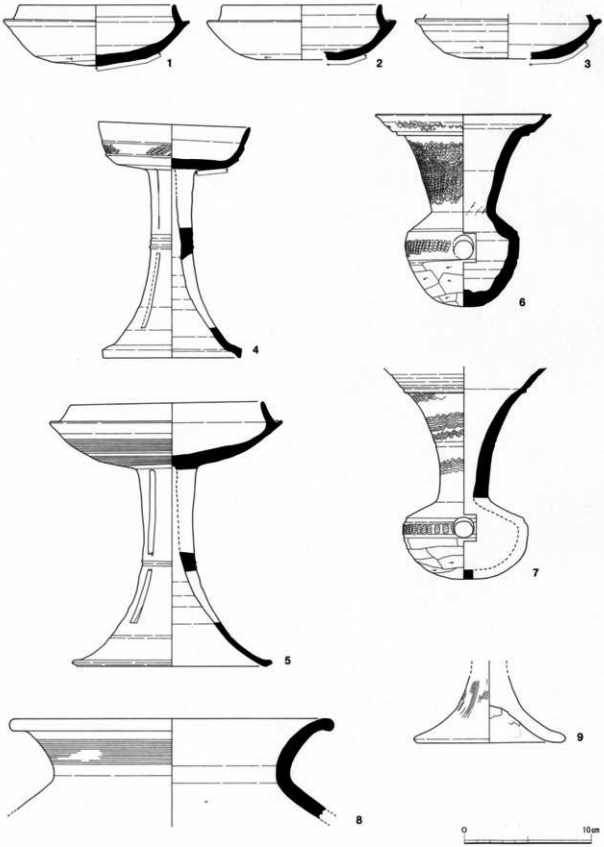




借屋17号墳周溝　土層注

1層：10YR2/3 黒褐色土　黄褐色粘土塊(1～2mm)微量含有、しまりなし
2層：7.5YR3/3 暗褐色土　黄褐色粘土塊(1～2mm)微量含有、(2～5mm)少量含有　炭粒(2～5mm)少量含有　ややしまる
3層：10YR2/2 黒褐色土　黄褐色粘土塊(1～5mm)多量含有、(5～10mm)微量含有　炭粒(1～2mm)多量含有　遺物多く含む層
3'層：3層土に黄褐色粘土塊（1～2mm）多量含有
4層：10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土　黄褐色粘土塊(2～10mm)多量含有、炭粒(1～5mm)多量含有
5層：10YR5/6 黄褐色粘質土　地山漸移層か?
6層：7.5YR2/2 黒褐色土　黄褐色粘土塊(5～10mm)少量含有　炭粒(5～10mm)多量含有
7層：10YR2/2 黒褐色土　黄褐色粘土塊(1～2mm)微量含有　炭粒(2～5mm)多量含有
8層：10YR3/3 暗褐色土　黄褐色粘土塊(1～2mm)微量含有
9層：7.5YR2/2 黒褐色土　黄褐色粘土塊(1～2mm)微量含有　炭粒(1～2mm)微量含有　しまりなし
10層：7.5YR2/2 黒褐色土　黄褐色粘土塊(1～2mm)微量含有

第36図　借屋17号墳実測図(S=1/120、1/40)



第37図　借屋17号墳出土遺物実測図（S=1/3）

第4章　まとめ

今回の調査では、群集墳を構成する「矢田借屋古墳群」について、従来未確認であった古墳を含めた新資料を報告することができた。ここで再度、本古墳群を整理し一覧したのが第2表である。

名称	所在地	墳　形	規模（　）は推定値	埋葬施設※1	調査年※2	調査主体※2	備　考
1号墳	矢田町	円墳	—	不明	—	—	消滅
2号墳	矢田町	円墳	最大径9m	箱形粘土棺	昭和25年(1950)	小松高校地歴クラブ	須恵器・直刀他、消滅
3号墳	矢田町	円墳	—	不明	—	—	消滅
4号墳	矢田町	円墳	最大径13m	箱形粘土棺	昭和25年(1950)	小松高校地歴クラブ	須恵器・埴輪・玉類、消滅
5号墳	矢田町	円墳	—	不明	—	—	消滅
6号墳	矢田町	円墳	—	不明	—	—	消滅
7号墳	矢田町	前方後円墳	全長35m	不詳（河原石積の横穴式石室?）	昭和30年(1955)	小松高校地歴クラブ	須恵器・埴輪・直刀・刀子の柄部・鉄鏃等、消滅
8号墳	矢田町	前方後円墳	全長30m	不詳（礫棺〈切石積横穴式石室〉?）	昭和36年(1961)	小松高校地歴クラブ	須恵器・埴輪・銀環、消滅
9号墳	月津町	円墳	（直径12.5m）	箱形粘土棺	平成10年(1998)	小松市教育委員会	須恵器・土師器・埴輪・刀子・鉄鏃・玉類、消滅
10号墳	**月津町**	**円墳**	**（直径10.5m）**	**不明**	平成10年(1998) **平成13年(2001)**	**小松市教育委員会**	**須恵器・土師器・特殊須恵器、消滅**
11号墳	月津町	円墳	（直径12.2m）	箱形粘土棺	平成10年(1998)	小松市教育委員会	須恵器・土師器、消滅
12号墳	**月津町**	**前方後円墳?**	**（後円？径16m）**	**不明**	**平成12年(2000)** **平成13年(2001)**	**小松市教育委員会**	**須恵器・土師器・埴輪、消滅**
13号墳	月津町	円墳	—	不明	—	—	一部残存
14号墳	**月津町**	**円墳**	**（直径7.5m）**	**不明**	**平成13年(2001)**	**小松市教育委員会**	**須恵器、消滅**
15号墳	**月津町**	**円墳**	**（直径9.5m）**	**不明**	**平成12年(2000)** **平成13年(2001)**	**小松市教育委員会**	**須恵器・土師器、消滅**
16号墳	**月津町**	**円墳**	**最大径9.7m**	**箱形粘土棺**	**平成13年(2001)**	**小松市教育委員会**	**須恵器・土師器・玉類、消滅**
17号墳	**月津町**	**円墳**	**最大径10.3m**	**不明**	**平成13年(2001)**	**小松市教育委員会**	**須恵器・土師器、消滅**

第2表　矢田借屋古墳群一覧表（ゴチック体は本報告書掲載）

※1　本古墳群における埋葬施設は様々な用語が定義されているが、本表では昭和25年調査時での用語に準じ、この呼称（「箱形粘土棺」）を用いる。

※2　平成11年度からは、（財）石川県埋蔵文化財センターが県営ほ場整備事業に係る「矢田野遺跡」「矢田借屋古墳群」の発掘調査を実施している（『石川県埋蔵文化財情報』）が、本表ではその成果まで盛り込むことはできなかった。

また、本調査において検出した遺構や遺物は多種多様であり、その全てについて時間的制約の中、精緻な検討を加えることは困難を極めた。そこで本調査成果における特記すべき点と、そこから考えうる課題を改めて掲げ、将来に委ねたいと思う。

借屋10号墳では「特殊須恵器」が出土し、あるいは墳丘上での葬送儀礼に使用されたものとも見ることができる。また県内出土例との対比からも、考察に値する。

借屋12号墳では、周溝の規模や出土遺物の様相から「前方後円墳」の可能性を有し、そうであれば本古墳群では借屋7号墳および8号墳に次いで、3基目の事例となる。より詳細な墳丘規格の検討がその確実性を高めうる。また大量の埴輪片の出土は、本古墳の性格を解明する上で欠かすことのできない資料であり、円筒埴輪の形態の差異なども含め、その歴史的背景を探ることは重要な点となる。

借屋16号墳では、いわゆる礫床をもつ粘土室の検出を見た。本古墳群では借屋2号墳・4号墳・9号墳・11号墳に次ぐ、5基目の事例である。本埋葬施設は、初見である念仏林古墳発掘調査（昭和24年）以後、着実にその調査例を増加させており、議論すべきものであることは言うまでもない。

最後に、本報告書の限られた紙幅では各古墳からの出土遺物の報告が主となり、本来詳述されるべき出土位置の検討や考察を欠く結果とならざるを得なかった。これら一切は担当者の責に帰するものである。また本報告書を作成するに当たっては、その多くを先学の文献・成果に拠った。全てを生かし切ることはできなかったが、ここにその典拠を記し、感謝申し上げる次第である。

引用・参考文献

石川県埋蔵文化財保存協会，1998：『八幡遺跡Ⅰ』

石川県立郷土資料館，1978：「金沢市長坂古墳群の研究」『石川県立郷土資料館紀要』第9号

石川考古学研究会，1978：「江沼古墳群分布調査報告」『石川考古学研究会々誌』第21号

石川考古学研究会，1997：『石川県考古資料調査・集成事業報告書　祭祀具Ⅱ』

川西宏幸，1978：「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号、4号　日本考古学会

小松高校地歴クラブ考古学研究班，1951：「江沼郡月津村矢田借屋古墳調査報告」『研究報告』第三輯　石川県立小松高等学校

小松高校地歴クラブ，1956：『石川県小松市矢田町所在借屋七号古墳調査報告』　小松高校地歴クラブ

小松高校地歴クラブ，1962：「借屋八号墳発掘調査」『石川県高等学校文化連盟郷土部会報』2号

小松市教育委員会，1989：『後山無常堂古墳・後山明神3号墳』

小松市教育委員会，1990：『二ツ梨東山古窯跡・矢田野向山古窯跡』

小松市教育委員会，1992：『矢田野エジリ古墳』

小松市教育委員会，1995：『念仏林南遺跡Ⅱ』

小松市教育委員会，1999：『林タカヤマ窯跡』

小松市教育委員会，2000：『矢田借屋古墳群』

（財）石川県埋蔵文化財センター，2001：『小松市ブッショウジヤマ古墳群』

（財）石川県埋葬文化財センター：『石川県埋蔵文化財情報』

寺井町教育委員会，1997：『加賀能美古墳群』

松岡町教育委員会・永平寺町教育委員会，2005：『石舟山古墳・鳥越山古墳・二本松山古墳』

山川出版社　1992　『前方後円墳集成　中部編』

雄山閣，1992：『古墳時代の研究9　古墳Ⅲ　埴輪』

雄山閣，1998：『古墳時代の研究6　土師器と須恵器』

雄山閣，1998：『古墳出土須恵器集成　第3巻　東日本編Ⅰ』

遺物観察表　凡例

1．「年度」は調査年度を示す。H12＝平成12年度調査、H13＝平成13年度調査である。

2．「実測」は実測番号を示し、出土品整理の遺物分類時に使用したもので、以下のように付している。なお実測した遺物の内には、本報告書未掲載のものも含まれている。

分類1	分類2	名称	実測番号
A　須　恵　器	A　食器	01　坏H身	001～022
		02　高坏	001～010
		03　坏H蓋	001～019
		04　高坏蓋	001
	B　貯蔵具他	01　甕	001～011
		02　壺	001～002
		03　短頸壺	001～002
		04　長頸壺	001～004
		05　厚底鉢	001
		06　小型壺	001～007
		07　小型壺蓋	001
		08　提瓶	001～002
		09　器台	001～005
		10　横瓶	001
		11　甕	001～022
		12　特殊須恵器	001
B　土　師　器	A　食器	01　埦	001～002
		02　高坏	001～004
	B　貯蔵具	01　壺	001
		02　鉢	001
C　その他の遺物	A　玉類	01　管玉	001～008
	B　埴輪	01　円筒埴輪	001～042

3．「胎土」の鑑定で「南加賀」とあるのは、小松市南部丘陵地に所在する「南加賀古窯跡群」産であることを表す。

4．「焼成」で示す用語はそれぞれ「堅」＝堅緻：焼きしまりが強いもの「普」＝普通：焼成の還元状態が適正のもの「生」＝生焼け：焼成の還元状態が不良で軟質なものを表す。

5．「色調」で示すものは、外面色調を基準としている。

6．「調整」で示す内容に対して、遺物実測図での表現が一部伴っていないものがある。

「借屋12号墳出土埴輪観察表」について

1．法量の各項目について、最大・最小の値を計測しているものがあるが、これは残存率の高いもの及び値の幅が特に大きいものについての実物の計測値である。よって、実測図に表れた数値とは必ずしも一致しない。また各部の計測位置は第16図で示す箇所であるが、完形品はなく、あくまでも部位の「一部」の値であることを明記しておく。

2．「部位」に示す用語のうち、器種の判明するものは「胴部」、不明なものは「体部」と呼び分けている。

3．「器高」の（　）内の数値は残存値を示す。

4．「口径」の（　）内の数値は図上で反転復元した推定値を示す。

5．「底径」の（　）内の数値は図上で反転復元した推定値を示す。

6．「調整」で示す用語はそれぞれ「口」＝口縁部「他」＝口縁部以外の部位全般を表す。
なお調整は詳細に観察されるべき事項であるが、概観による特徴のみにとどめている。

借屋10号墳出土遺物観察表

図版	番号	年度	実測	分類1	分類2	名称	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整	残存率	時期	備考
6	1	H13	AB12001	須恵器	貯蔵具他	特殊須恵器	口径6.1　頸径4.5　胴径5.6　基部径2.3　残存高8.7	南加賀	堅	黒灰				装飾付須恵器の一部？

借屋12号墳出土遺物観察表1

図版	番号	年度	実測	分類1	分類2	名称	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整	残存率	時期	備考
10	1	H12	AA03005	須恵器	食器	坏H蓋	端部径14.0　器高3.4	南加賀	堅	青灰	天井部回転ヘラ削り	端部破片		
10	2	H12	AA03008	須恵器	食器	坏H蓋	端部径16.4　器高4.5	南加賀	生	灰白		略完形	6c後半	
10	3	H12	AA03007	須恵器	食器	坏H蓋	端部径15.2　器高4.0	南加賀	堅	褐灰		1/2	6c後半	器表面酸化
10	4	H12	AA03002	須恵器	食器	坏H蓋	端部径13.2　器高4.2		堅	青灰	天井部ヘラ削り	5/6	6c後半	
10	5	H13	AA03015	須恵器	食器	坏H蓋	端部径15.8　残存高4.1	南加賀	生	黄灰	天井部回転ヘラ削り	1/6	6c後半	
10	6	H12	AA01002	須恵器	食器	坏H	口径13.2　受部径15.9　器高4.8 口高2.2	南加賀	普	青灰	底部一体部下半回転ヘラ削り	1/2	6c前半	
10	7	H12	AA01007	須恵器	食器	坏H	口径12.1　受部径15.0　器高5.6 口高2.0	南加賀	普	灰	底部回転ヘラ削り	1/5	6c前半	
10	8	H12	AA01008	須恵器	食器	坏H	口径12.4　受部径15.0　器高5.4 口高2.0	南加賀	生	灰	底部一体部下半回転ヘラ削り	2/3	6c前半	
10	9	H12	AA01009	須恵器	食器	坏H	口径12.8　受部径14.9　器高4.3 口高1.0	南加賀	生	青灰	体部下半ヘラ削り	3/4	6c後半	内面一部酸化
10	10	H12	AA01013	須恵器	食器	坏H	口径12.8　受部径14.8　器高4.2 口高1.0	南加賀	生	赤灰	体部下半ヘラ削り	3/4	6c後半	内外面一部酸化
10	11	H12	AA01014	須恵器	食器	坏H	口径12.7　受部径15.2　器高4.4 口高0.7	南加賀	普	褐灰	体部下半ヘラ削り	1/2	6c後半	内外面酸化
10	12	H12	AA01017	須恵器	食器	坏H	口径13.0　受部径15.6　残存高3.8 口高0.8	南加賀	生	灰白		1/2	6c後半	
10	13	H12	AA01018	須恵器	食器	坏H	口径13.5　受部径15.2　器高4.3 口高0.6	南加賀	普	青灰	体部下半ヘラ削り	略完形	6c後半	
10	14	H12	AA01022	須恵器	食器	坏H	口径12.4　受部径15.0　残存高3.6 口高1.0	南加賀	普	青灰		口縁部破片	6c後半	
10	15	H12	AA01016	須恵器	食器	坏H	口径12.8　受部径15.4　残存高3.1 口高0.8	南加賀	堅	青灰		1/5	6c後半	
10	16	H12	AA01021	須恵器	食器	坏H	口径14.0～11.5　受部径15.4～13.6 残存高4.3　口高0.6	南加賀	堅		底部回転ヘラ削り	3/4	6c後半	ヘラ記号あり。焼け歪み大
10	17	H12	AA01020	須恵器	食器	坏H	口径14.0～11.5　受部径15.6～13.5 残存高5.2　口高0.8	南加賀	堅	灰	底部回転ヘラ削り	4/5	6c後半	焼け歪み大
11	18	H12	AA02002	須恵器	食器	高坏	口径12.9　脚基部径4.3　残存高4.5 坏高4.4	南加賀	堅	青灰	坏部底部回転ヘラ削り	坏部1/3		
11	19	H12	AA02010	須恵器	食器	高坏	口径11.2　残存高3.5	南加賀	堅	灰	坏部底部回転ヘラ削り	坏部破片		
11	20	H12	AA02004	須恵器	食器	高坏	口径11.6　残存高4.2	南加賀	普	褐灰	坏部底部ホカキ目	坏部破片		
11	21	H12	AA02001	須恵器	食器	高坏	口径10.8　残存高3.8	南加賀	堅	青灰	坏部体部下半一底部ヘラ削り	坏部1/2		
11	22	H12	AA02003	須恵器	食器	高坏	口径10.3　脚基部径3.6　脚端部径10.4 器高14.4　坏高3.3　脚高11.1	南加賀	堅	灰	坏部体部下半一脚部ホカキ目	坏部1/3、脚部完形		
11	23	H12	AA02007	須恵器	食器	高坏	脚基部径5.4　脚端部径17.2　残存高16.0 脚高14.2	南加賀	堅	黒灰		脚部1/3		
11	24	H12	AA02008	須恵器	食器	高坏	脚基部径4.4　脚端部径18.2　残存高13.9 脚高13.7	南加賀	堅	褐灰		脚部1/3		
11	25	H12	AB01001	須恵器	貯蔵具他	壺	口径15.0　頸径4.8　胴径10.1　器高17.0 頸高10.6　胴高6.4	南加賀	普	灰	胴部下半ヘラ削り→ナデ	4/5		
11	26	H12	AB01005	須恵器	貯蔵具他	壺	頸径5.1　胴径8.4　残存高12.0 胴高6.4		堅	黒灰	胴部下半一底部ホカキ目	2/3		
11	27	H12	AB01006	須恵器	貯蔵具他	壺	頸径5.5　胴径9.8　残存高11.7 胴高7.5	南加賀	普	灰	胴部下半ヘラ削り	1/2		
11	28	H12	AB01008	須恵器	貯蔵具他	壺	頸径5.4　胴径8.7　残存高8.2 胴高6.9		堅	青灰	胴部下半一底部回転ヘラ削り	1/2		
11	29	H12	AB03001	須恵器	貯蔵具他	短頸壺	口径10.2　頸径10.8　胴径23.4 残存高17.9　頸高1.8	南加賀	普	灰	胴部外面ホカキ目	3/4		

借屋12号墳出土遺物観察表2

図版	番号	年度	実測	分類1	分類2	名称	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整	残存率	時期	備考
12	30	H12	AB04001	須恵器	貯蔵具他	長頸壺	口径7.4　頸径5.7　胴径14.3　脚基部径4.5 残存高28.1　頸高8.8　脚高10.9	雨加賀	堅	黒灰	胴部一底部へラ削り	4/5		
12	31	H12	AB04004	須恵器	貯蔵具他	長頸壺	口径8.7　頸径6.2　胴径13.0 残存高17.3　頸高9.0	雨加賀	普	灰	胴部下半ヘラ削り	1/4		
12	32	H12	AB04002	須恵器	貯蔵具他	長頸壺	胴径14.8　脚基部径6.6　脚端部径10.7 残存高12.8　脚高3.8	雨加賀	普	青灰		1/2		
12	33	H12	AB06003	須恵器	貯蔵具他	小型壺	頸径6.5　胴径10.8　残存高5.3		普	青灰	胴部上半カキ目、下半ヘラ削り	2/3		外来系？
12	34	H13	AB06001	須恵器	貯蔵具他	小型壺	口径7.9　頸径8.1　胴径10.1 器高7.5	雨加賀	堅	灰	胴部一底部下半回転ヘラ削り	略完形		
12	35	H12	AB06007	須恵器	貯蔵具他	小型壺	口径9.5　頸径8.6　胴径13.0 器高10.9	雨加賀	普	青灰	胴部一底部へラ削り	2/5		
12	36	H12	AB06005	須恵器	貯蔵具他	小型壺	口径6.0　頸径8.6　胴径13.2 残存高8.4	雨加賀	普	黄灰		1/2		
12	37	H12	AB06002	須恵器	貯蔵具他	小型壺	口径5.6　頸径6.0　胴径10.0 器高7.1	雨加賀	生	灰	胴部下底付近一底部へラ削り	略完形		
12	38	H12	AB05001	須恵器	貯蔵具他	厚底鉢	口径18.1　残存高13.7	雨加賀	堅	青灰	胴部外面カキ目	4/5		
12	39	H12	AB10001	須恵器	貯蔵具他	横瓶	口径15.8　頸径12.0　残存高3.0 頸径2.8	雨加賀	堅	灰	胴部叩き、外面カキ目	1/4		
13	40	H13	AB09003	須恵器	貯蔵具他	器台	脚端部径26.0　残存高20.2	雨加賀	普	黒灰	脚部外面カキ目	脚部破片		
13	41	H13	AB09004	須恵器	貯蔵具他	器台	残存高13.7	雨加賀	普	灰	脚部外面カキ目	脚部破片		
13	42	H12	AB09002	須恵器	貯蔵具他	器台	受部径30.2　脚基部径9.0　脚端部径27.9 器高40.5　脚部高29.6	雨加賀	生	灰	受部底部叩き出し→外面カキ目、脚部横方向ヘラ削り	略完形		
13	43	H12	AB09005	須恵器	貯蔵具他	器台	脚基部径9.6　残存高11.0		堅	黒灰	受部底部叩き出し→外面カキ目、脚部叩き→カキ目	脚部破片		
14	44	H12	AB11017	須恵器	貯蔵具他	甕	口径18.4　頸径15.2　頸高3.5 器高29.2　胴部最大径29.6	雨加賀	生	灰白	胴部叩き、外面カキ目	略完形		
14	45	H12	AB11018	須恵器	貯蔵具他	甕	頸径14.6　残存高21.3　胴部最大径25.3	雨加賀	普	灰	底部叩き出し、外面カキ目	胴部破片		
14	46	H12	AB11010	須恵器	貯蔵具他	甕	口径24.0　頸径21.1　頸高3.1 残存高30.3	雨加賀	普	灰	胴部叩き、外面カキ目、内面ナデ	口縁部～胴部破片		
14	47	H12	AB11002	須恵器	貯蔵具他	甕	口径22.0　頸径16.7　頸高4.1 残存高6.7	雨加賀	堅	黒灰	頸部外面カキ目	口縁部～頸部破片		
14	48	H12	AB11012	須恵器	貯蔵具他	甕	口径25.0　頸径11.4　頸高4.9 残存高6.9	雨加賀	生	灰白	胴部叩き、外面カキ目	口縁部～胴部破片		
14	49	H12	AB11001	須恵器	貯蔵具他	甕	口径28.0　頸径21.4　頸高4.7 残存高8.9	雨加賀	普	灰	胴部叩き、外面カキ目	口縁部～胴部破片		
14	50	H12	AB11013	須恵器	貯蔵具他	甕	口径26.0　頸径20.3　頸高4.4 残存高8.5	雨加賀	普	青灰	胴部叩き、外面カキ目	口縁部～胴部破片		
14	51	H13	AB11016	須恵器	貯蔵具他	甕	口径50.4　残存高13.6	雨加賀	堅	黒灰	頸部外面カキ目	口縁部～頸部破片		
14	52	H13	AB11014	須恵器	貯蔵具他	甕	口径40.4　残存高11.9	雨加賀	堅	黒灰	頸部外面カキ目	口縁部～頸部破片		
14	53	H13	AB11019	須恵器	貯蔵具他	甕	口径46.6　頸径30.6　残存高17.1	雨加賀	堅	黒灰		口縁部～頸部破片		
15	54	H12	AB11021	須恵器	貯蔵具他	甕	口径24.0　頸径21.0　頸高5.1 残存高55.7	雨加賀	生	灰白	底部叩き出し、外面カキ目	口縁部～胴部破片		
15	55	H12	AB11022	須恵器	貯蔵具他	甕	口径22.0　頸径16.0　頸高3.7 器高49.0	雨加賀	普	灰	底部叩き出し、外面カキ目	略完形		
15	56	H12	BB02001	土師器	貯蔵具	鉢	口径13.5　残存高4.9			黄褐	胴部外面刷毛目、内面磨き、内黒	口縁部～胴部破片		
15	57	H12	BA02003	土師器	食器	高坏				黄褐	脚部外面刷毛目、内黒	坏部～脚部破片		
15	58	H12	BA02004	土師器	食器	高坏				黄褐	脚部外面刷毛目、内黒	坏部～脚部破片		
15	59	H12	BA02001	土師器	食器	高坏	脚端部径12.4　残存高7.8			黄褐	脚部外面刷毛目	脚部破片		
15	60	H12	BB01001	土師器	貯蔵具	壺	頸径7.4　残存高11.1			黄褐	胴部外面刷毛目	頸部～胴部破片		

借屋12号墳出土埴輪観察表

図版	番号	年度	実測	器種	部位	法量(cm) 器高 最大/最小	器高 平均	口径 最大/最小	口径 平均	底径 最大/最小	底径 平均	口縁部長 最大/最小	口縁部長 平均	突帯間隔 3段 最大/最小	突帯間隔 3段 平均	突帯間隔 4段 最大/最小	突帯間隔 4段 平均	底部長 最大/最小	底部長 平均	器面の残存率	調整 外面	調整 内面	備考
17	1	H13	CB01002	円筒	口縁部から底部	—	45.1	—	(23.8)	—	(18.6)	9.1 ——— 8.5	8.8	8.8 ——— 8.3	8.6	—	—	—	28.0	14/36	I:ナナメハケ 他:タテハケ	ナデ	反転実測、須恵質、底部断面L字形、第1突帯省略
17	2	H13	CB01001	円筒	口縁部から底部	—	44.4	—	(30.2)	—	(15.2)	9.4 ——— 8.9	9.2	12.3 ——— 12.0	12.2	—	—	23.2 ——— 22.9	23.1	9/36	I:ナナメハケ 他:タテハケ	ナデ	反転実測、須恵質、底部断面L字形、第1突帯省略
18	3	H12	CB01021	円筒	口縁部から胴部	—	(26.0)	—	(25.6)	—	—	8.6 ——— 8.3	8.5	9.2 ——— 8.5	8.9	—	—	—	—	2/36	I:ナナメハケ 他:タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質
18	4	H12	CB01037	円筒	口縁部から胴部	—	(25.8)	—	26.2	—	—	10.6 ——— 10.2	10.4	11.5 ——— 10.6	11.1	—	—	—	—	17/36	I:ナナメハケ 他:タテハケ	I:ヨコハケ 他:ナデ	両面実測、上錦質
18	5	H12	CB01020	円筒	口縁部から胴部	—	(25.4)	—	25.6	—	—	9.6 ——— 8.2	8.9	11.0 ——— 10.1	10.6	—	—	—	—	36/36	I:ナナメハケ 他:タテハケ	ナデ	両面実測、上錦質
18	6	H12	CB01018	円筒	口縁部から胴部	—	(23.3)	—	(26.4)	—	—	—	8.7	12.0 ——— 11.5	11.8	—	—	—	—	1/36	I:ナナメハケ 他:タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質
18	7	H13	CB01007	円筒	口縁部から胴部	—	(23.2)	—	(25.0)	—	—	8.8 ——— 8.5	8.7	9.7 ——— 9.4	9.6	—	—	—	—	12/36	I:ナナメハケ 他:タテハケ	I:ヨコハケ 他:ナデ	反転実測、上錦質
18	8	H13	CB01008	円筒	口縁部から胴部	—	(22.0)	—	(27.8)	—	—	7.2 ——— 6.9	7.1	10.6 ——— 10.4	10.5	—	—	—	—	5/36	I:ナナメハケ 他:タテハケ	I:ヨコハケ 他:ナデ	反転実測、上錦質
19	9	H12	CB01028	円筒	口縁部から胴部	—	(22.0)	—	(26.0)	—	—	10.0 ——— 9.6	9.8	11.0 ——— 10.6	10.8	—	—	—	—	7/36	I:ナナメハケ 他:タテハケ	I:ヨコハケ 他:ナデ	反転実測、上錦質
19	10	H12	CB01019	円筒	口縁部から胴部	—	(20.4)	—	(23.4)	—	—	—	8.8	—	—	—	—	—	—	4/36	I:ナナメハケ 他:タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質
19	11	H12	CB01025	円筒	口縁部から胴部	—	(18.2)	—	(21.9)	—	—	—	9.8	—	—	—	—	—	—	2/36	I:ナナメハケ 他:タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質
19	12	H12	CB01024	円筒	口縁部から胴部	—	(16.9)	—	(29.0)	—	—	—	10.1	—	—	—	—	—	—	6/36	I:ナナメハケ 他:タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質
19	13	H13	CB01009	円筒	口縁部から胴部	—	(15.1)	(25.0) ——— (21.8)	(22.4)	—	—	8.6 ——— 7.8	8.2	—	—	—	—	—	—	16/36	I:ナナメハケ 他:タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質
19	14	H12	CB01043	円筒	口縁部	—	(13.4)	—	(30.1)	—	—	—	9.9	—	—	—	—	—	—	8/36	ナナメハケ	ナデ	反転実測、須恵質
19	15	H13	CB01041	円筒	口縁部	—	(12.1)	—	(26.0)	—	—	—	8.7	—	—	—	—	—	—	9/36	ナナメハケ	ナデ	反転実測、須恵質
19	16	H13	CB01006	円筒	口縁部	—	(9.3)	—	(31.4)	—	—	6.5 ——— 6.2	6.4	—	—	—	—	—	—	8/36	ナナメハケ	I:ヨコハケ 他:ナデ	反転実測、上錦質
19	17	H12	CB01039	円筒	口縁部	—	(9.3)	—	(27.6)	—	—	6.0 ——— 5.8	5.9	—	—	—	—	—	—	3/36	ナナメハケ	I:ヨコハケ 他:ナデ	反転実測、上錦質
19	18	H12	CB01034	円筒	口縁部	—	(4.6)	—	(24.1)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11/37	ナナメハケ	ナデ	反転実測、上錦質
20	19	H13	CB01003	朝顔形	口縁部から肩部	—	(30.0)	—	(33.6)	—	—	5.4 ——— 4.2	4.8	—	—	—	8.2	—	—	15/36	I:ナナメハケ 他:タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質
20	20	H13	CB01013	朝顔形	口縁部から胴部	—	(12.2)	—	(37.8)	—	—	3.7 ——— 3.5	4.5	—	—	—	—	—	—	3/36	I:ナナメハケ 他:タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質
20	21	H12	CB01040	朝顔形	口縁部から胴部	—	(12.6)	—	(37.8)	—	—	5.9 ——— 5.5	5.6	—	—	—	—	—	—	4/36	I:ナナメハケ 他:タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質
20	22	H13	CB01012	朝顔形	口縁部から胴部	—	(16.4)	—	(33.7)	—	—	6.3 ——— 6.1	6.2	—	—	—	—	—	—	5/36	I:ナナメハケ 他:タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質
20	23	H13	CB01011	朝顔形	口縁部から胴部	—	(12.2)	—	(33.2)	—	—	5.0 ——— 4.2	4.6	—	—	—	—	—	—	10/36	I:ナナメハケ 他:タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質
20	24	H13	CB01005	朝顔形	胴部から肩部	—	(11.3)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	36/36	タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質
20	25	H13	CB01004	朝顔形	肩部から胴部	—	(28.6)	—	—	—	—	—	—	12.8 ——— 12.1	12.5	—	—	—	—	21/36	タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質、前面突帯省略
21	26	H12	CB01035		体部	—	(18.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11/36	タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質
21	27	H12	CB01042		体部	—	(17.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7/36	タテハケ	ナデ	反転実測、須恵質
21	28	H12	CB01029		体部	—	(13.3)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9/36	タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質
21	29	H12	CB01027		底部	—	(15.2)	—	—	—	(18.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	15/36	タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質、断面L字形
21	30	H12	CB01036		底部から体部	—	(20.1)	—	—	—	(16.1)	—	—	—	—	—	—	—	17.8	5/36	タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質、断面L字形
21	31	H12	CB01017		底部	—	(20.1)	—	—	—	(16.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	14/36	タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質、断面U字形
21	32	H12	CB01038		底部	—	(16.4)	—	—	—	(17.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	8/36	タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質、断面U字形
22	33	H12	CB01022		底部から体部	—	(24.5)	—	—	—	18.4	—	—	—	—	—	—	18.2 ——— 17.6	17.9	20/36	タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質、断面L字形、楕円状
22	34	H13	CB01010		底部	—	(13.8)	—	—	—	(22.0)	—	—	—	—	—	—	—	—	8/36	タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質、断面U字形
22	35	H12	CB01030		底部	—	(13.7)	—	—	20.0 ——— 18.6	19.3	—	—	—	—	—	—	—	—	22/36	タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質、断面L字形、楕円状
22	36	H13	CB01014		底部	—	(12.0)	—	—	—	(19.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	11/36	タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質、断面L字形
22	37	H12	CB01026		底部	—	(11.9)	—	—	—	(18.3)	—	—	—	—	—	—	—	—	8/36	タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質、断面L字形
22	38	H12	CB01032		底部	—	(8.8)	—	—	19.1 ——— 17.2	18.2	—	—	—	—	—	—	—	—	27/36	タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質、断面L字形、楕円状
22	39	H12	CB01031		底部	—	(8.8)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	18/36	タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質、断面L字形
22	40	H12	CB01033		底部	—	(7.5)	—	—	17.3 ——— 16.6	17.0	—	—	—	—	—	—	—	—	20/36	タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質、断面L字形、楕円状
22	41	H12	CB01023		底部	—	(6.4)	—	—	—	19.0	—	—	—	—	—	—	—	—	18/36	タテハケ	ナデ	反転実測、上錦質、断面L字形、楕円状
22	42	H12	CB01044		底部	—	(4.9)	—	—	—	(17.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	4/36	タテハケ	ナデ	反転実測、須恵質、底部U字状

借屋14号墳出土遺物観察表

図版	番号	年度	実測	分類1	分類2	名称	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整	残存率	時期	備考
24	1	H13	AB04003	須恵器	貯蔵具他	長頸壺	口径10.1　頸径7.0　胴径12.9 器高15.2　頸高6.4　胴高8.8	雲加質	堅	黒灰	頸部～胴部上半カキ目、胴部下半～下底ヘラ削り	略完形		
24	2	H13	AB11006	須恵器	貯蔵具他	甕	口径29.0　頸径21.1　頸高5.2 残存高9.3	雲加質	堅	灰	胴部叩き、外面カキ目	口縁部～胴部破片		

借屋15号墳出土遺物観察表

図版	番号	年度	実測	分類1	分類2	名称	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整	残存率	時期	備考
26	1	H13	AA03001	須恵器	食器	坏H蓋	端部径14.2　器高3.9	雲加質	普	青灰	天井部回転ヘラ削り	1／2	6c前半	
26	2	H13	AA03011	須恵器	食器	坏H蓋	端部径14.2　残存高3.9	雲加質	普	青灰		端部破片	6c前半	
26	3	H12	AA03012	須恵器	食器	坏H蓋	端部径15.0　残存高4.0	雲加質	堅	黒灰	天井部手持ちヘラ削り	1／3	6c前半	
26	4	H12	AA03004	須恵器	食器	坏H蓋	端部径13.7　器高3.9	雲加質	普	灰	天井部ヘラ削り	略完形	6c中頃～後半	
26	5	H12	AA03013	須恵器	食器	坏H蓋	端部径14.0　残存高4.2	雲加質	堅	灰	天井部回転ヘラ削り	1／4	6c中頃～後半	
26	6	H12	AA03003	須恵器	食器	坏H蓋	端部径15.2　器高4.2	雲加質	普	灰	天井部手持ちヘラ削り	完形	6c後半	
26	7	H12	AA03006	須恵器	食器	坏H蓋	端部径15.2　器高4.2	雲加質	普	青灰	天井部回転ヘラ削り	1／2	6c後半	
26	8	H12	AA03014	須恵器	食器	坏H蓋	端部径16.0　残存高4.6	雲加質	堅	青灰	天井部手持ちヘラ削り	端部破片	6c後半	
26	9	H13	AA01005	須恵器	食器	坏H	口径12.4　受部径15.3　器高5.0 口高1.2	雲加質	生	灰	底部回転ヘラ削り	略完形	6c前半	
26	10	H12	AA01012	須恵器	食器	坏H	口径14.2　受部径16.5　器高4.6 口高0.9	雲加質	普	青灰	体部下半ヘラ削り	完形	6c後半	
26	11	H12	AA01011	須恵器	食器	坏H	口径13.6　受部径15.8　器高4.6 口高1.0	雲加質	生	赤灰	底部手持ちヘラ削り?	略完形	6c後半	外面酸化
26	12	H12	AA04001	須恵器	食器	高坏蓋	端部径15.0　つまみ径4.1　器高4.7 つまみ高0.9	雲加質	堅	青灰	天井部回転ヘラ削り	1／2		
26	13	H13	AA02006	須恵器	食器	高坏	口径13.7　受け部径16.6　残存高5.4 口高1.5　坏部高5.2	雲加質	堅	灰	坏部底部カキ目	坏部 略完形		
26	14	H13	AB01009	須恵器	貯蔵具他	甕	胴径12.6　残存高9.4	雲加質	普	灰～青灰	胴部下半ヘラ削り	胴部1／4		
26	15	H12	AB03002	須恵器	貯蔵具他	短頸壺	頸径9.6　胴径18.4　残存高13.2	雲加質	堅	灰	胴部外面叩き、 下半～底部カキ目	3／4		
27	16	H12	AB02002	須恵器	貯蔵具他	壺		雲加質	生	灰白	胴部外面上半カキ目、 下半～底部叩き	略完形		
27	17	H12	AB08001	須恵器	貯蔵具他	提瓶	口径9.1　頸径6.2　胴幅22.1　胴厚16.3 器高29.2　頸高8.0　胴高21.7	雲加質	生	灰	胴部叩き→カキ目	略完形		
28	18	H12	AB09001	須恵器	貯蔵具他	器台	受部径31.4　脚基部径11.0　残存高23.8	雲加質	堅	灰	受部底部叩き出し→ 外面カキ目、 脚部外面カキ目	受部～ 脚部破片		
28	19	H12	AB11011	須恵器	貯蔵具他	甕	口径22.0　頸径15.7　頸高5.7 残存高17.5	雲加質	普	青灰	胴部叩き、外面カキ目、 頸部外面カキ目	口縁部～ 頸部破片		
29	20	H12	AB11003	須恵器	貯蔵具他	甕	口径24.6　頸径17.9　残存高6.8	雲加質	堅	黒灰	頸部外面カキ目	口縁部 破片		
29	21	H12	AB11004	須恵器	貯蔵具他	甕	口径25.0　頸径19.8　頸高4.6 残存高8.0	雲加質	堅	黒灰		口縁部～ 頸部破片		
29	22	H12	AB11005	須恵器	貯蔵具他	甕	口径22.1　残存高8.6	雲加質	堅	黒灰		口縁部 破片		

借屋16号墳出土遺物観察表

図版	番号	年度	実測	分類1	分類2	名称	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整	残存率	時期	備考
31	1	H13	AA03016	須恵器	食器	坏H蓋	端部径15.0　残存高4.4	雨加質	生	黄灰	天井部ヘラ削り	端部破片	6c中頃～後半	
31	2	H13	AA01001	須恵器	食器	坏H	口径11.6　受部径14.0　器高6.0 口高1.5	雨加質	普	黒灰	底部回転ヘラ削り	略完形	6c前半	
31	3	H13	AB01003	須恵器	貯蔵具他	甕	頸径5.5　胴径9.3　残存高13.2 胴高6.9	雨加質	普	青灰	胴部下半ヘラ削り	3／5		
31	4	H13	AB01010	須恵器	貯蔵具他	甕	頸径6.2　胴径9.6　残存高9.1 胴高7.7	雨加質	堅	灰	胴部下半一底部回転ヘラ削り	1／2		
31	5	H13	AB02001	須恵器	貯蔵具他	壺	口径11.3　頸径8.3　胴径15.4 器高16.5	雨加質	堅	青灰	頸部～胴部中位カキ目、底部押さえ	2／3		
31	6	H13	AB06004	須恵器	貯蔵具他	小型壺	口径7.1　頸径6.4　胴径8.5 器高5.5	雨加質	堅	灰	胴部下半回転ヘラ削り	略完形		底部指圧痕
31	7	H13	AB08002	須恵器	貯蔵具他	提瓶	口径11.7　頸径8.9　胴幅23.2　胴厚13.3 器高25.8　頸高3.0　胴高22.5	雨加質	普	黒灰	胴部中ほ～カキ目	2／3		
35	1	H13	AA03009	須恵器	食器	坏H蓋	端部径13.2　残存高3.6	雨加質	堅	青灰		端部破片	6c前半	埋葬施設出土
35	2	H13	AA03019	須恵器	食器	坏H蓋	端部径14.6　残存高3.0	雨加質	堅	青灰		端部破片	6c前半	埋葬施設出土
35	3	H13	AA03010	須恵器	食器	坏H蓋	端部径15.3　残存高2.4	雨加質	生	橙		端部破片	6c後半	埋葬施設出土 銅花・鉄成品 AA03019とセット
35	4	H13	AA01004	須恵器	食器	坏H	口径12.2　受部径15.2　器高5.4 口高1.9	雨加質	生	灰	底部回転ヘラ削り	略完形	6c前半	埋葬施設出土
35	5	H13	AA01019	須恵器	食器	坏H	口径12.1　受部径15.0　残存高2.8 口高1.1	雨加質	生	橙		口縁部破片	6c後半	埋葬施設出土 銅花・鉄成品 AA03010とセット
35	6	H13	AB07001	須恵器	貯蔵具他	小型壺蓋	端部径9.4　器高3.4	雨加質	普	黒灰		略完形		埋葬施設出土 AB06006とセット
35	7	H13	AB06006	須恵器	貯蔵具他	小型壺	頸径7.6　胴径13.8　残存高7.2	雨加質	普	灰	胴部下半一底部回転ヘラ削り	2／5		埋葬施設出土 AB07001とセット
35	8	H13	CA01001	その他遺物	玉類	管玉	直径1.5　長さ2.6　孔径知0.1 孔径長0.3							埋葬施設出土 片面穿孔 碧玉質
35	9	H13	CA01002	その他遺物	玉類	管玉	直径0.95　長さ2.8　孔径知0.15 孔径長0.3							埋葬施設出土 片面穿孔 碧玉質
35	10	H13	CA01003	その他遺物	玉類	管玉	直径1.2　長さ3.5　孔径知0.15 孔径長0.3							埋葬施設出土 片面穿孔 碧玉質
35	11	H13	CA01004	その他遺物	玉類	管玉	直径1.1　長さ2.85　孔径知0.1 孔径長0.25							埋葬施設出土 片面穿孔 碧玉質
35	12	H13	CA01005	その他遺物	玉類	管玉	直径1.0　長さ2.65　孔径知0.1 孔径長0.4							埋葬施設出土 片面穿孔 碧玉質
35	13	H13	CA01006	その他遺物	玉類	管玉	直径0.75　長さ0.23　孔径知0.13 孔径長0.33							埋葬施設出土 片面穿孔 碧玉質
35	14	H13	CA01007	その他遺物	玉類	管玉	直径0.8　長さ0.21　孔径知0.15 孔径長0.25							埋葬施設出土 片面穿孔 緑色凝灰岩質
35	15	H13	CA01008	その他遺物	玉類	管玉	直径1.0　長さ0.26　孔径知0.15 孔径長0.2							埋葬施設出土 片面穿孔 碧玉質

借屋17号墳出土遺物観察表

図版	番号	年度	実測	分類1	分類2	名称	法量(cm)	胎土	焼成	色調	調整	残存率	時期	備考
37	1	H13	AA01003	須恵器	食器	坏H	口径12.2　受部径14.7　器高4.8 口高1.4	雨加質	普	青灰	底部回転ヘラ削り	略完形	6c前半	
37	2	H13	AA01006	須恵器	食器	坏H	口径12.5　受部径15.0　器高4.3 口高1.4	雨加質	堅	灰	底部回転ヘラ削り	1／2	6c前半	
37	3	H13	AA01015	須恵器	食器	坏H	受部径14.8　残存高3.6	雨加質	堅	灰	底部回転ヘラ削り	1／2	6c後半	
37	4	H13	AA02005	須恵器	食器	高坏	口径12.0　脚基部径3.8　脚端部径11.0 器高18.7　坏高3.6　脚高14.9		堅	黒灰	坏部底部回転ヘラ削り	2／5		
37	5	H13	AA02009	須恵器	食器	高坏	口径15.1　受部径18.4　脚基部径4.8　脚端部径15.8 器高21.0　口高15.1　坏高5.1　脚高15.9	雨加質	普	青灰	坏部体部中位～底部～脚部カキ目	略完形		
37	6	H13	AB01002	須恵器	貯蔵具他	甕	口径13.7　頸径5.0　胴径9.0 器高15.3　頸高7.8　胴径7.5	雨加質	普	青灰	胴部下半ヘラ削り	2／3		
37	7	H13	AB01004	須恵器	貯蔵具他	甕	頸径3.9　胴径9.9　残存高16.9 胴高6.1	雨加質	堅	黒灰	胴部下半ヘラ削り	4／5		胴部内に円孔例9孔状の粘土板
37	8	H13	AB11008	須恵器	貯蔵具他	甕	口径25.6　頸径18.6　頸高4.5　残存高7.9	雨加質	堅	青灰	胴部中ほ、外面カキ目	口縁部～頸部破片		
37	9	H13	BA02002	土師器	食器	高坏	脚端部径11.4　残存高5.3			黄褐	脚部外面刷毛目	脚部破片		

平成12年度詳細分布調査　試掘坑掘削

平成12年度詳細分布調査　作業状況

平成13年度発掘調査　表土除去

平成13年度発掘調査　作業状況

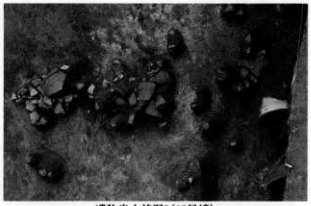
特殊須恵器出土状況（10号墳）

借屋10号墳　完掘全景

周溝検出状況（12号墳）

周溝土層堆積状況（12号墳・B－B'アゼ）

遺物出土状況1（12号墳）


遺物出土状況2（12号墳）

借屋12号墳　完掘全景

周溝検出状況（14号墳）

壺出土状況（14号墳）

借屋14号墳　全景

周溝検出状況（15号墳）

周溝土層堆積状況（15号墳・C—C′アゼ）

遺物出土状況（15号墳）

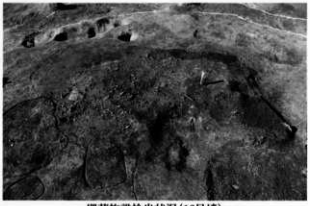
借屋15号墳　完掘全景

周溝検出状況（16号墳）

周溝土層堆積状況（16号墳・D—D'アゼ）

遺物出土状況（16号墳）

小型壺出土状況（16号墳）

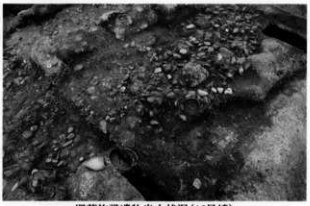

埋葬施設検出状況（16号墳）

埋葬施設掘下状況（16号墳）

埋葬施設全景（16号墳）

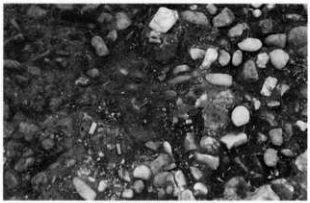
埋葬施設粘土壁検出状況（16号墳）

埋葬施設粘土壁断面（16号墳・E—E'アゼ）


埋葬施設遺物出土状況（16号墳）

埋葬施設坏出土状況（16号墳）

埋葬施設小型壺蓋出土状況（16号墳）


埋葬施設管玉出土状況（16号墳）

埋葬施設礫床断面（16号墳）

埋葬施設完掘全景（16号墳）

借屋16号墳　完掘全景

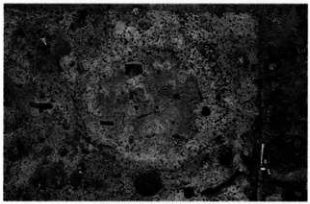
周溝検出状況（17号墳）

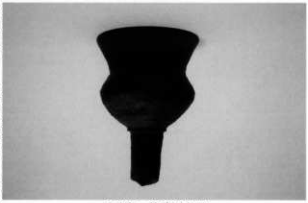
周溝土層堆積状況（17号墳・D—D'アゼ）

遺物出土状況（17号墳）

鼓出土状況（17号墳）

高坏出土状況（17号墳）


借屋17号墳　完掘全景



第6図1　特殊須恵器

第10図2　坏H蓋

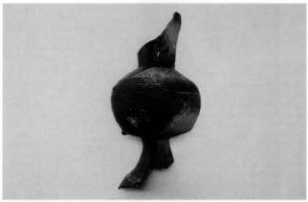
第10図6　坏H身

第10図9　坏H身

第11図22　高坏

第11図25　鼎

第11図29　短頸壺

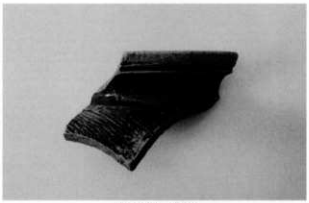


第12図30　長頸壺

第12図33　小型壺

第12図37　小型壺

第12図38　厚底鉢



第12図39　横瓶

第13図42　器台

第14図44　甕

第14図53　甕

第17図1　円筒埴輪

第17図2　円筒埴輪

第17図5　円筒埴輪

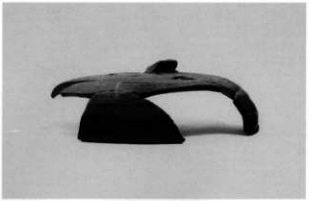
第20図25　朝顔形円筒埴輪

第24図1　壺

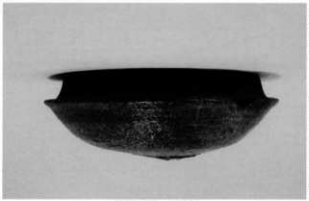
第24図2　甕

第26図1　坏H蓋

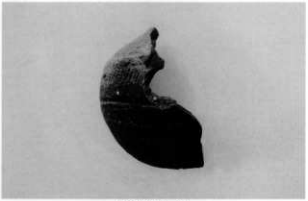
第26図9　坏H身



第26図12　高坏蓋



第26図13　高坏



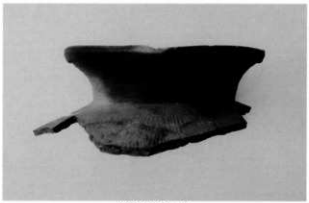
第26図14　甕

第26図15　短頸壺

第27図16　壺

第27図17　提瓶

第28図18　器台



第28図19　甕

第31図1　坏H蓋

第32図2　坏H身

第31図3　甕

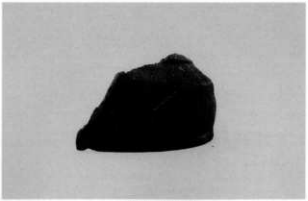
第31図4　甕

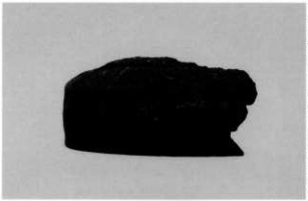
第31図5　壺

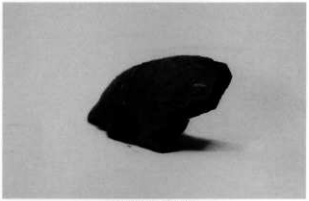
第31図6　小型壺

第31図7　提瓶（正面）

第31図7　提瓶（側面）

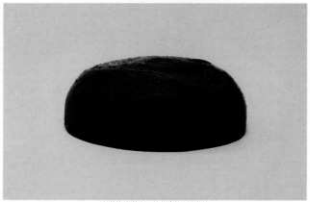

第35図1　坏H蓋


第35図2　坏H蓋

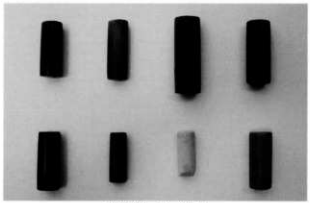

第35図3　坏H蓋

第35図4　坏H身

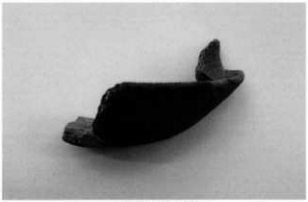
第35図5　坏H身


第35図6　小型壺蓋

第35図7　小型壺

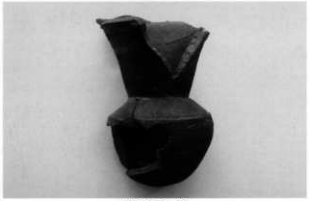

第35図8～15　管玉

第37図1　坏H身

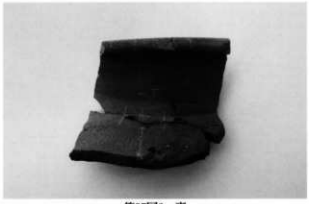

第37図2　坏H身

第37図4　高坏

第37図5　高坏


第37図6　甕

第37図7　甕


第37図8　甕

第37図9　高坏

報告書抄録

ふりがな	こまつしないいせきはっくつちょうさほうこくしょⅡ
書名	小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ
副書名	矢田借屋古墳群
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	岩本　信一
編集機関	小松市教育委員会
所在地	〒923-8650　石川県小松市小馬出町91番地　TEL(0761)22-4111
発行年月日	西暦2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やたかりや 矢田借屋 こふんぐん 古墳群	いしかわけん 石川県 こまつし 小松市 つきまち 月津町	17203	03103	26度 20分 41秒	136度 22分 10秒	詳細分布調査 2000.10.24 ～ 2001.02.28	32,743.39㎡	宅地造成工事
						発掘調査 2001.07.16 ～ 2002.03.26	1,500㎡	個人住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢田借屋 古墳群	古墳	古墳時代後期	古墳6基 (5基は円墳、1基は前方後円墳?)	玉類(管玉) 須恵器(坏・高坏・甕・壺・鉢・提瓶・器台・横瓶・甕・特殊須恵器) 土師器(埦・高坏・壺・鉢) 埴輪(円筒埴輪)	新規の古墳を確認(借屋14・15・16・17号墳)。また、12号墳では大量の埴輪片、16号墳では埋葬施設を検出し、本古墳群の性格を解明する資料を追加することができた。

小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ

矢田借屋古墳群

発　行　日　2006年3月31日

編集・発行　石川県小松市教育委員会
〒923-8650
石川県小松市小馬出町91番地
TEL 0761-22-4111

印　　刷　マルト印刷工業株式会社